次ページへ続く

Continued on next page...

古筆の模刻―『浪華帖仮名巻』と『梅園奇賞』―

『浪華帖仮名巻』影印・飜字・解説

高田信敬

解題

『浪華帖仮名巻』は、大阪の書家森川世黄（一七六一～一八三〇）の撰・刊行になるものであって、書状文書を主体とした『集古浪華帖』の続篇たるべく仮名古筆資料を数多く収めている。『集古浪華帖』五巻は文政二年（一八一九）の刊記を、『浪華帖仮名巻』二巻は翌三年の跋文を有す。両者を比較するに、本篇たる『集古浪華帖』の方が手のこんだ丁寧な作りとなっていて、今は佚してしまった原拠資料の代役[1]を十分にはたしうるものといえる。しかし、ここに影印・飜字する『浪華帖仮名』もまた、刻・刷ともやや見劣りがするとは言え、いくつかの学界未紹介の古筆切や原拠資料の所在のいまでは明かにしがたいものが含まれていて――詳しくは後の解説に就かれたい――、やはり注目すべき模刻本なのである。

さて、個別的断片的にはすでに国文学者・書道史家によって考察が進められてきている[2]『浪華帖仮名巻』だが、全体にわたる論述は、管見の及ぶ限り一つもない。この書物に含まれる古筆資料の性格と価値とを見定めるためには、一種の模刻専門家[3]であったと思われる編者森川世黄の伝記研究、原拠資料をいかなる貴神豪家[4]に仰いだかの調査等も必要となる。今回はかかる多面的な考察の基礎たるべく、本文を影印・飜字、簡単な解説を付して公刊することとした。その彫版の完璧、摺刷の華麗という点で『千とせのためし』に一籌を輸するも、書跡資料のみの模刻集としては屈指の力篇たるこの『集古浪華帖』『浪華帖仮名巻』の研究が、爾後積み重ねられてゆくことを期待する次第である。

影印に用いた原本は、国文学研究資料館蔵（レ2―63）で、上下二巻合一冊、二九・九×二一・三糎、やや虫損あるも刷[5]りは概して佳良である。なお本書にはごく大ざっぱな伝称筆者名表記のほかは、切名・伝来等何の説明もなく、かつ料紙の大きさを通例の模刻本のようには枠で示すことをしていないので、一点一点の資料がどこから始まりどこで終わるのか判然としがたい。したがって推測に推測を重ねて原拠資料を比定せざるを得ぬ個所も数多あり、とんでもない誤解や矛盾をおかしていることと思われる。大方の批正を乞いたい。

解説に際しては、一々明記しないが春名好重『古筆大辞典』の恩恵を蒙った。記して謝意を表す。

（註）

(1)小野道風書状（巻二所収）はその最たるものであって、現在一つも残っていない彼の書状十三通の模刻が、書道史研究上の貴重資料としてしばしば引用転載される。

(2)萩谷朴『平安朝歌合大成』は本書を広く利用したものの一つである。

(3)『集古十種』の編纂に参画、今回影印・飜字する『梅園奇賞』や、水野忠邦編『野泉帖』への寄与、古器物図録たる『文華帖』の編刊など、この種の仕事に練達の人であったらしい。

(4)資料の提供源のすくなくとも一つは近衛家周辺ではなかったかと推される。いずれ機会を見て別に考えたい。

(5)森川世黄は元来私家版として印行したものであろうが、天保一〇年（一八三九）に大阪の書肆今津屋辰三郎より売弘めの願いが出されている（『天保以降大阪出版書籍目録』）。世黄没後九年のことであった。また明治刷とおぼしきものも存在する。資料館蔵本の位置を初刷りから明治刷りまでのどのあたりにおくかは今後諸本の書誌的調査を俟って決定すべきだが、概してかなり早い頃の印行と思われる。

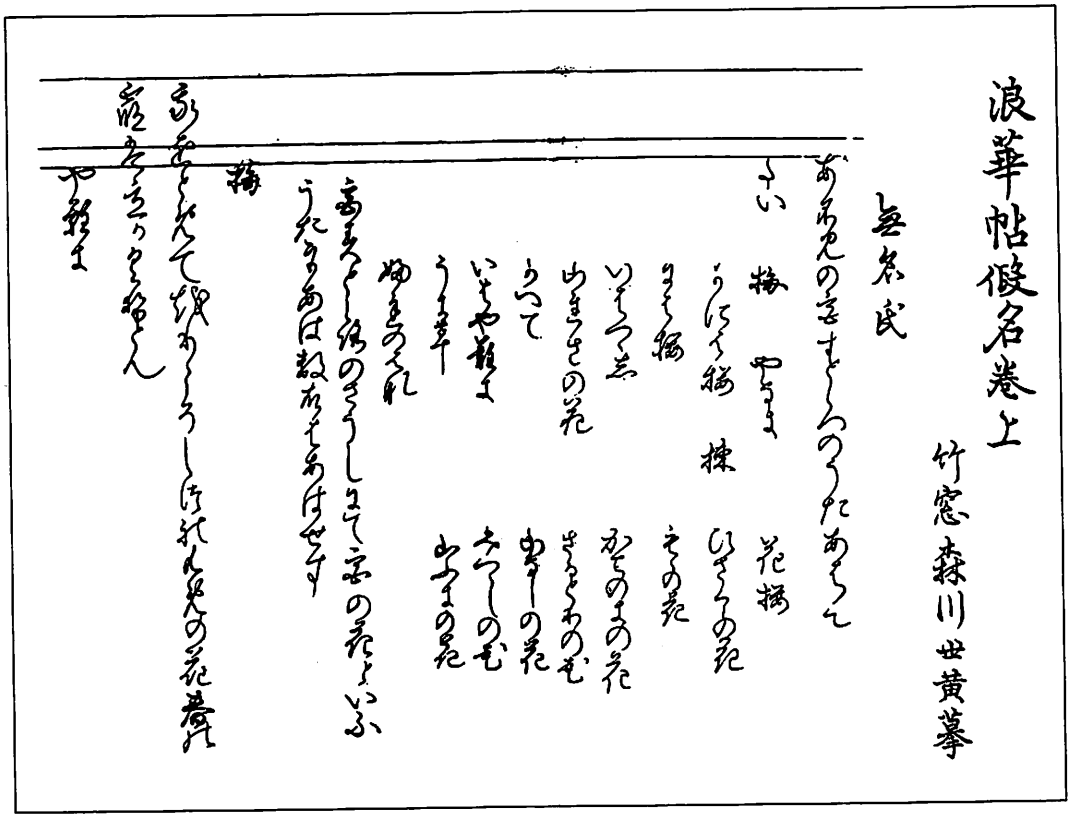
凡例

一、飜字は通行の字体を以ておこなう。ただし仮名遣い、字配りはなるべく原本に忠実であることを心がけた。

一、模刻された各資料には、一連番号（(1)〜(35)）を付す。

一、典拠とした文献は左の如し。

勅撰集　『新編国歌大観』
万葉集　『国歌大観』
私家集　『私家集大成』
和漢朗詠集　『日本古典文学大系』



上1オ

1ウ

無名氏

(1)あふみの宮すところのうたあはせ

たい　梅　やなき　花桜

かには桜　棟　ひさくらの花

には桜　もゝの花

いはつゝし　かちのきの花

山ちさの花　さるとりの花

かへて　山なしの花

いはやなき　みつゝしの花

うき草　山ふきの花

ふちのはな

宮すところのさうしにて宮の花といふ

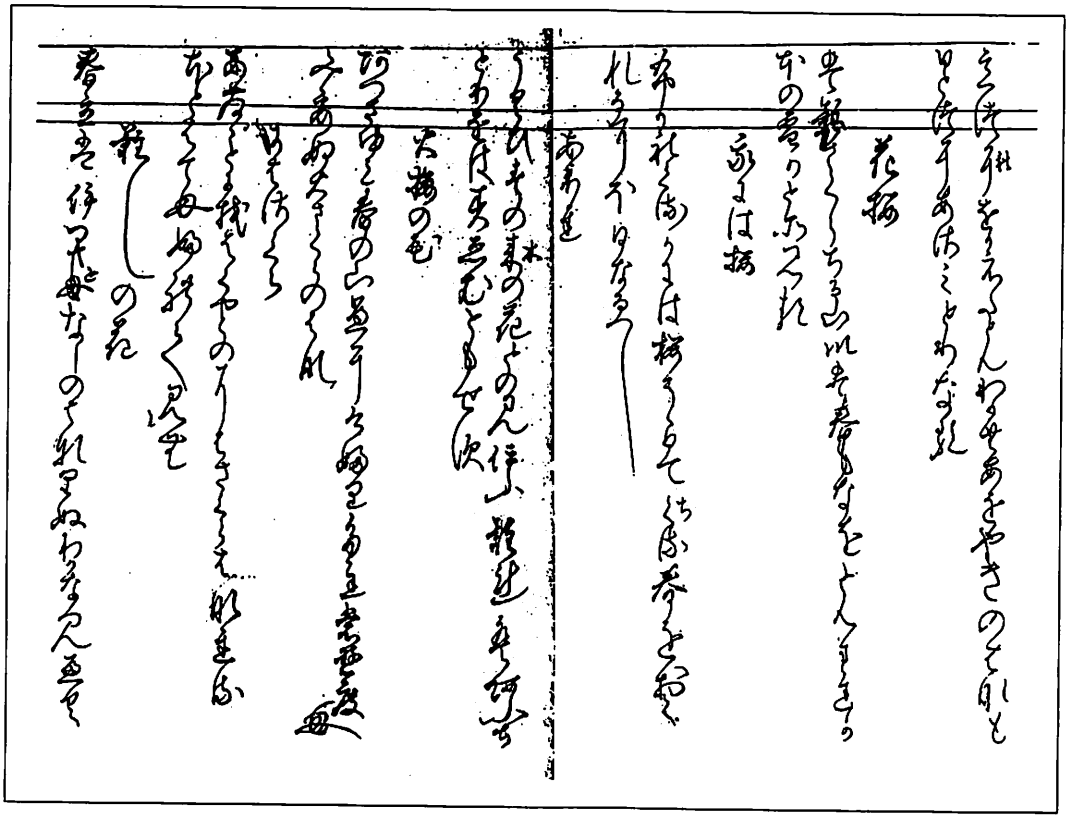
うたをあはす右はあはせす

梅

かをとめてをりこそしつれむめの花春の

霞は立かくせとも

やなき



2ウ　　2オ

いつにをかえたともわかむあをやきのはなも
ひとつにあさみとりなる

花桜

はなさくらちる山川は春もなをともまちか
ほの雪かとそ見る

かには桜

ふかれくるかには桜そゝひてくる春をおく
れるにほひなるへし

あふち

うくひすの来の花とのみいふなれはあふち
とりをはすゑむともせす

火桜の花

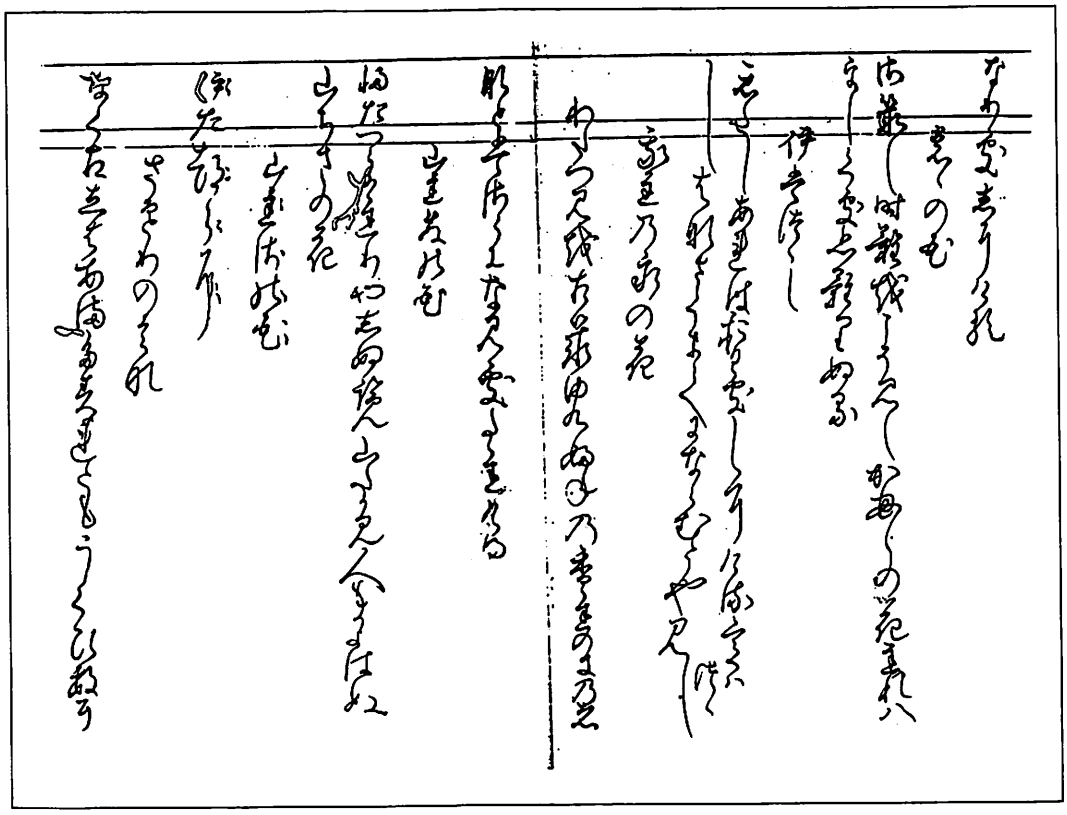
あつさゆみ春の山へにけふりたちもゆとも
みえぬ火さくらのはな

にはさくら

あさことに我はくやとのにはさくらはなちる
ほとはてもふれて見む

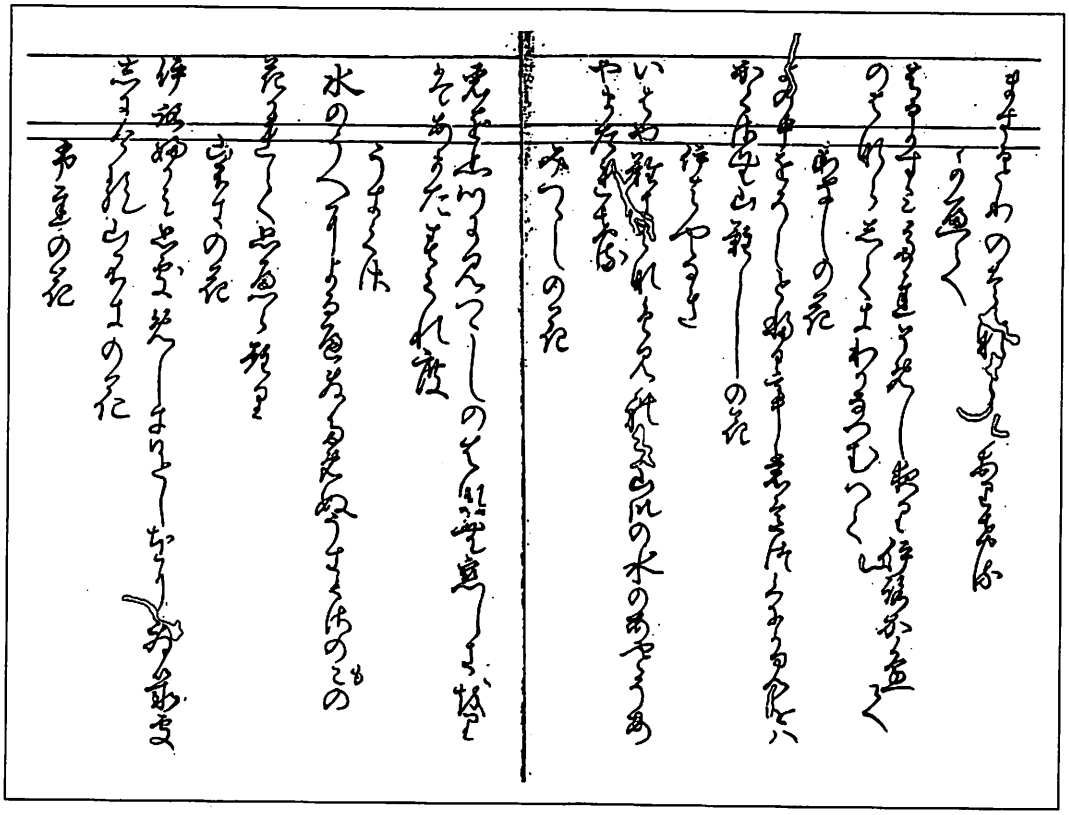
なしの花

春立はいつ事もなしのはなりぬわかなつむへく



3オ　　3ウ

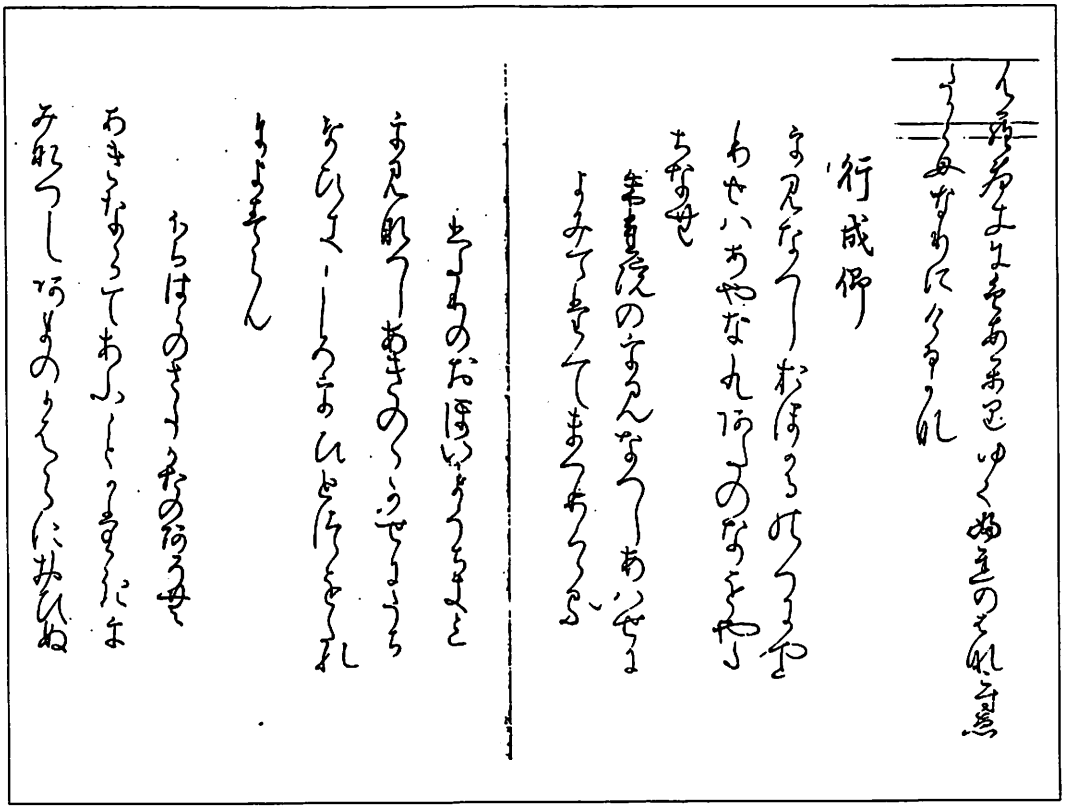
なりそしにける
　もゝの花
さきし時なをこそ見しかもゝの花ちれは
をしくそ思なりぬる
　いはつゝし
えたしあれはおひそしにけるいはつゝ
しはなさくまてにならむとや見し
　かちのきの花
わたつみをこきゆくふねのかちのきのは
なとはさらになみそたちける
　山ちさの花
いたつらにちりやしぬ覧山たかみ人もかよはぬ
山ちさの花
　山ちさの花
いたつらに
　さるとりのはな
なくこゑはあまたすれともうくひすに



4オ　4ウ

まさるとりのはなく□ありける
　かへて
はるかすみたちそめしよりいろかへて
のはならしてきわかなつむへく
　山なしの花
よの中をうしといひてもいつくにかみをは
かくさむ山なしの花
　いはやなき
いはやなきはな色みれ□山川の水のあやとそあ
やまたれける
　みつゝしの花

君を思心に見つゝしのはなむ恋しきをり
はあまたすくれと
　うきくさ
水のうへによるへさためぬうきくさのこの
花かれて思へらなり
　山ふきの花
いろふかみ思そめしをひとしをりさきそ
しにける山ふきの花
　ふちの花



5オ

5ウ

むらさきに色あかりゆくふちのはなこすゑ
たかくもなりにけるかな

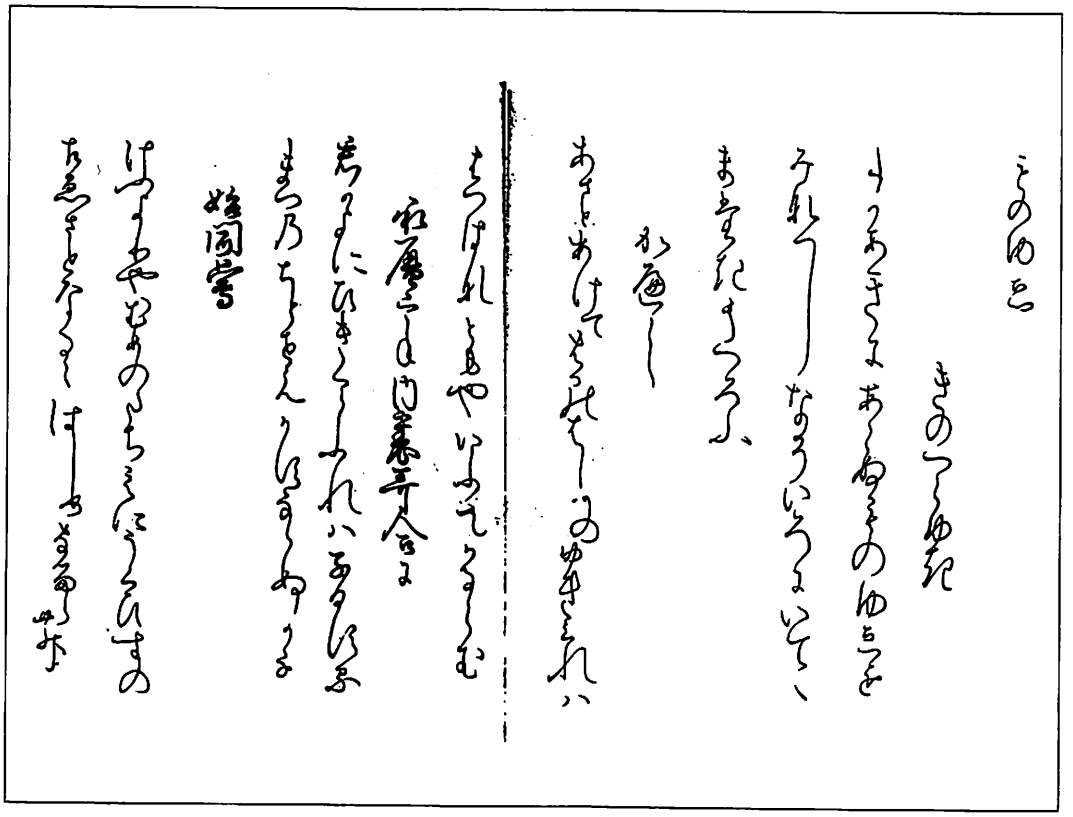
行成卿

(2)をみなへしおほかるのへにやと
りせはあやなくあたのなをやた
ちなむ

朱雀院のをみなへしあはせに
よみてたてまつりける

ひたりのおほいまうちきみ
をみなへしあきのゝかせにうち
なひきこゝろをひとつをたれ
によすらん

ふちはらのさたかたのあそむ
あきならてあふことかたきを
みなへしあまのかはらにおひぬ



6オ　6ウ

ものゆゑ

きのつらゆき

たかあきにあらぬものゆゑを
みなへしなそいろにいてゝ
またきうつろふ

(3)　かへし

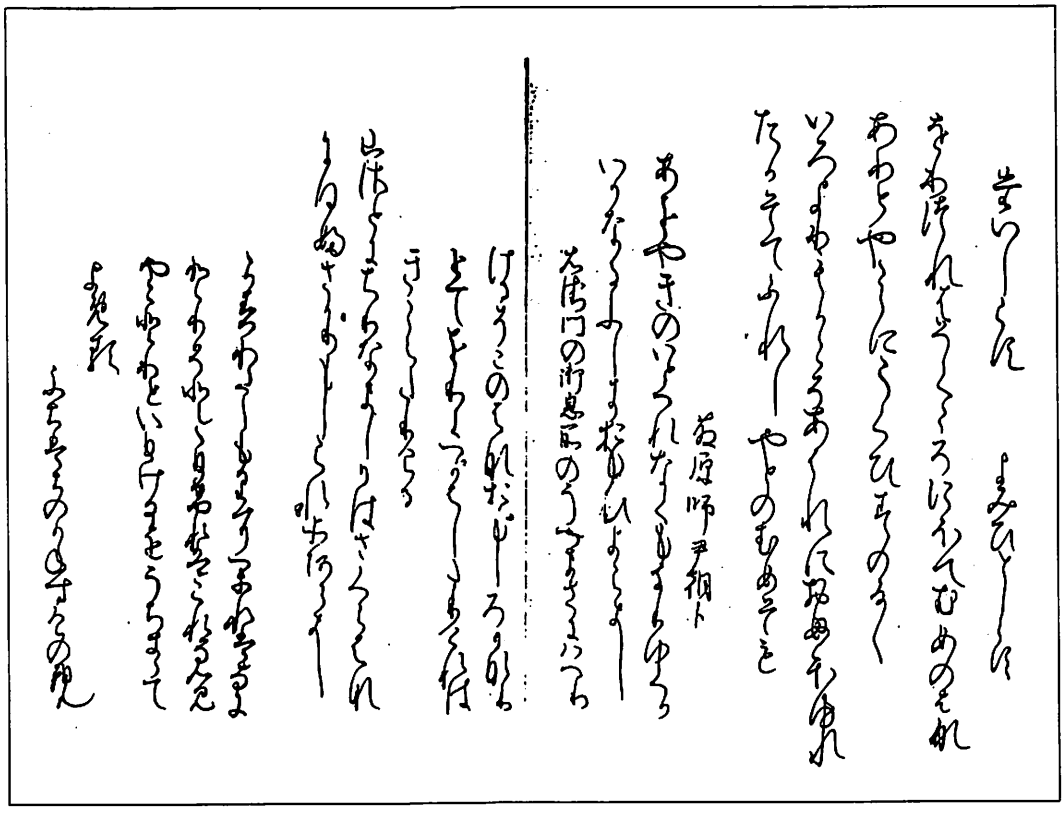
あさとあけてはるのはしめのゆきみれは
はつはなともやいふへかるらむ

永暦三年内裏哥合に

君かよにひきくらふれは子日する
まつのちとせもかすならぬかな

始聞鶯

けふよりやむめのたちえにうくひすの
こゑさとなるゝはしめなるらむ

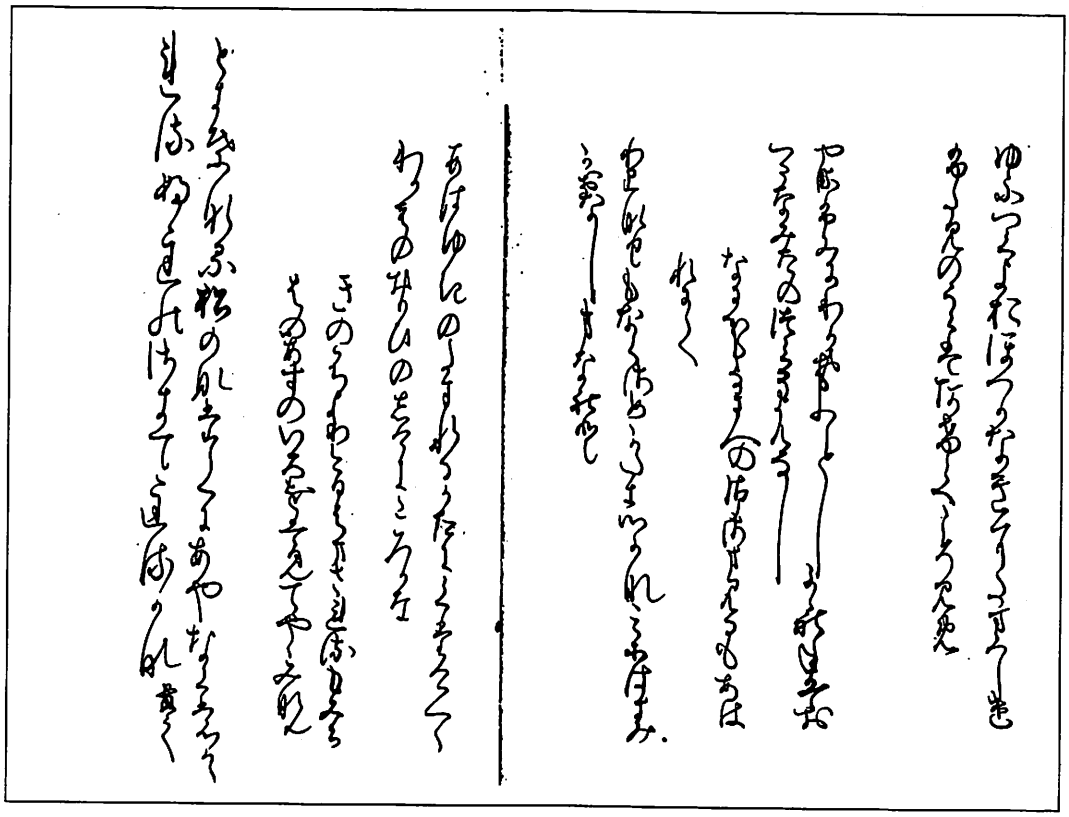


7ウ　　7オ

(4)
たいしらす　よみひとしらす
をりつれはそてこそにほへむめのはな
ありとやこゝにうくひすのなく
いろよりもかこそあはれにおもほゆれ
たかそてふれしやとのむめそも

(5)
藤原師尹朝臣
あをやきのいとつれなくもなりゆくか
いかなるふしにおもひよらまし
右衛門の御息所のうつまさにはへり
けるそこのはなおもしろかなり
とてをりにつかはしたりけれは
きこえたりける
山さとにちりなましかはさくらはな
にほふさかりもしらすそあらまし

(6)
らすわたしもりにかれはなに
とりそとゝひけれはこれなんみ
やことりといひけるをうちきゝて
よめる
ふちはらのかねすけの朝臣



8オ　8ウ

ゆふつくよおほつかなきにたまくしけ
ふたみのうらはあけてこそ見め

(7)やるふみにわかおもふとしかゝれねはお
つるなみたのつくるよもなし
なに心もなき人の御さま見るもあは
れにて
わりなくもなくさめかたき心かなこゝそはきみ
かおなし事なれと

(8)あはゆきのたまれるかたにくたけつゝ
わかものおもひのしけきころかな

(9)　きのふより今日はまされるもみち
はのあすのいろをは見てやゝみなん

(10)ときはなる松のなたてにあやなくもかゝ
れるふちのさきてちるかな貫之

行経卿

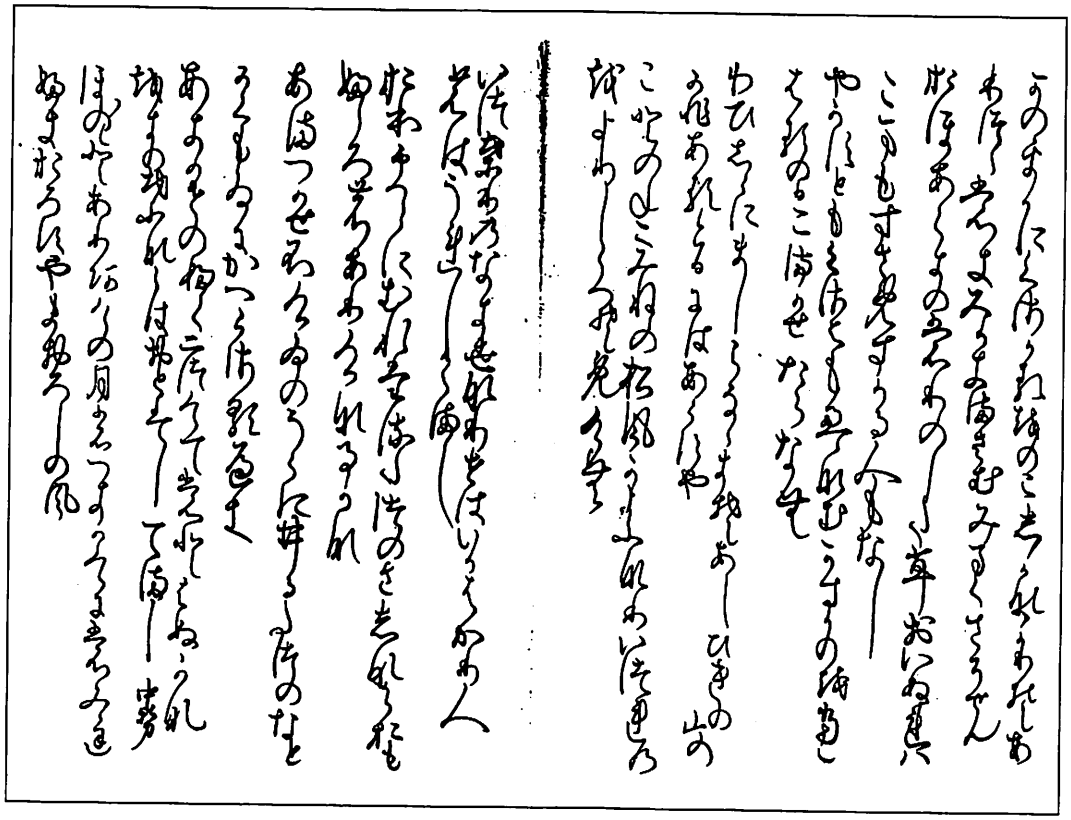
9オ

9ウ

行経卿

(11)よそにのみゝてやゝみなむかつらきやたかま
のやまのみねのしらくも
かすみはれみとりのそらものとけくてある
かなきかにあそふいとゆふ
あかつきのなからましかはしらつゆの
おきてわひしきわかれせましや

ときはなるまつのみとりも春くれはいま
ひとしほのいろまさりけり
われみてもひさしくなりぬすみよしのきし
のひめまついくよへぬらん
あまくたるあら人神のおひあひをおもへは
ひさしすみよしのまつ
よにふれはことの葉しけきくれたけの
うきふしことにうくひすそなく
しくれふるおとはすれともくれたけのなと
よとゝもにいろもかはらぬ

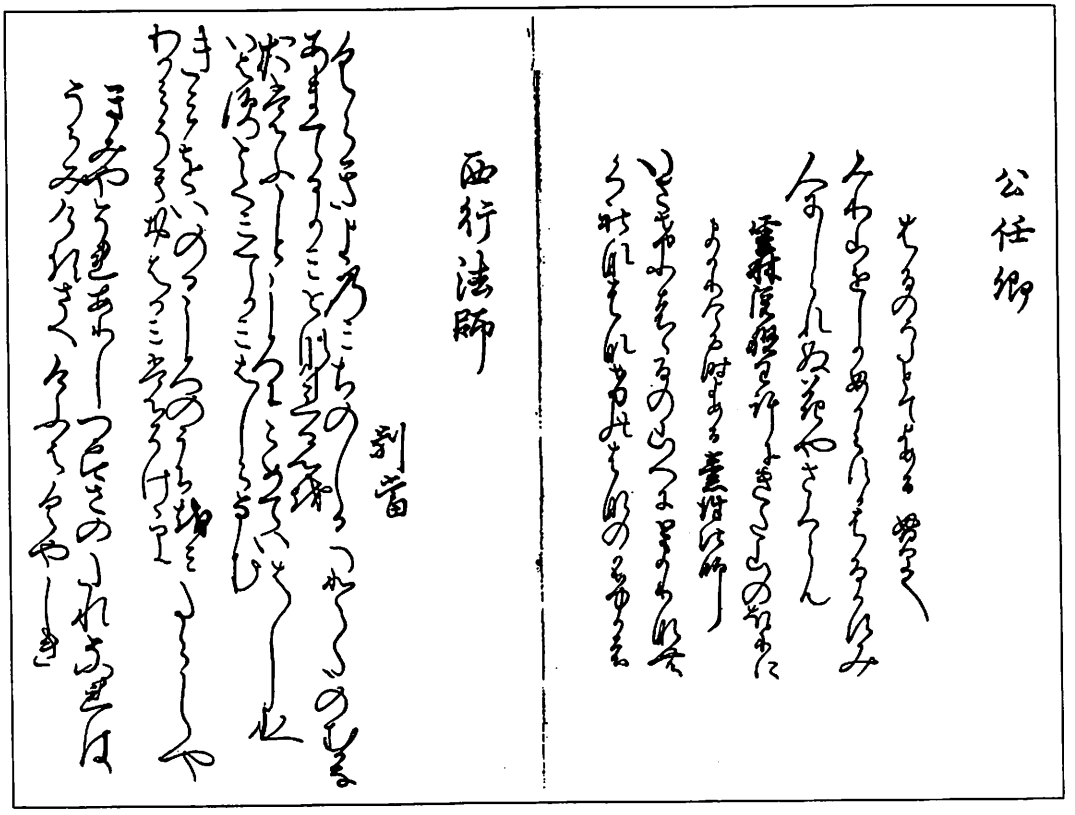


10オ

10ウ

かのをかにくさかるをのこしかなかりそあ
りつゝもきみかきまさむみまくさにせん
おほあらきのもりのした草おいぬれは
こまもすさめすかる人もなし
やかすともくさはもえなむかすかのをたゝ
はるのひにまかせたらなむ
わひしらにましらなゝきそあしひきの山の
かひある今日にはあらすや
ことのねにみねの松風かよふなりいつれの
をよりしらへそめけむ

いつはりのなき世なりせはいかはかり人
のはうれしからまし（ママ）
おほそらにむれたるたつのさしなからおも
ふこゝろのありけなるかな
あまつかせふけゐのうらにゐるたつのなと
かくもゐにかへらさるへき
あきかせのふくにつけてもとはぬかな
をきの葉ならはおとはしてまし 中務
ほの〳〵とありあけの月のつきかけにもみち
ふきおろすやまおろしの風



11オ　11ウ

公任卿

(12)　はるのうたとてよめる　貫之

みわ山をしかもかくすかはるかすみ
人にしられぬ花やさくらん

雲林院親王許にきた山のほとりに
まかりける時よめる　素性法師

いさけふはゝるの山へにとまりなむ
くれなはなけのはなのかけかは

西行法師

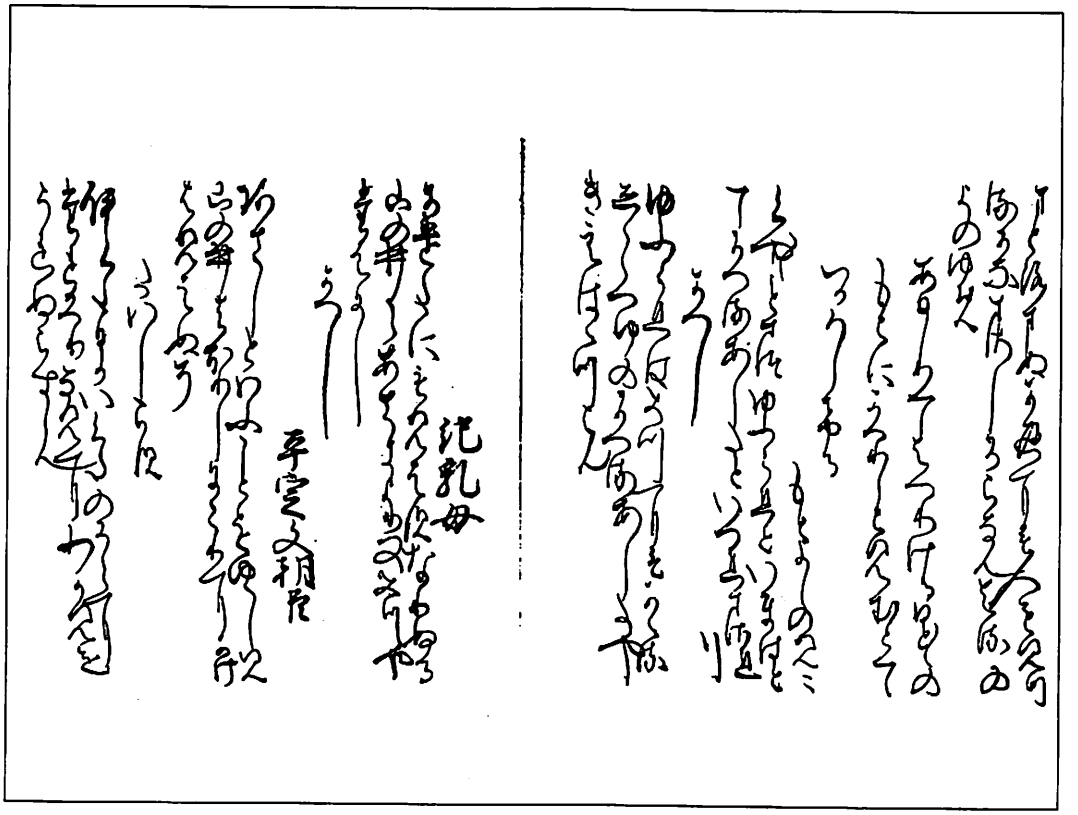
(13)　別当

くらきよのみちのしるへとたのむかな
あまてるかみとなれる心を

おもふことこゝろにこめていはし水
いはすとすみてかみはしらなむ

きみをいのるこゝろのうちをみたらしや
わかみそもおはかみもそけゝり

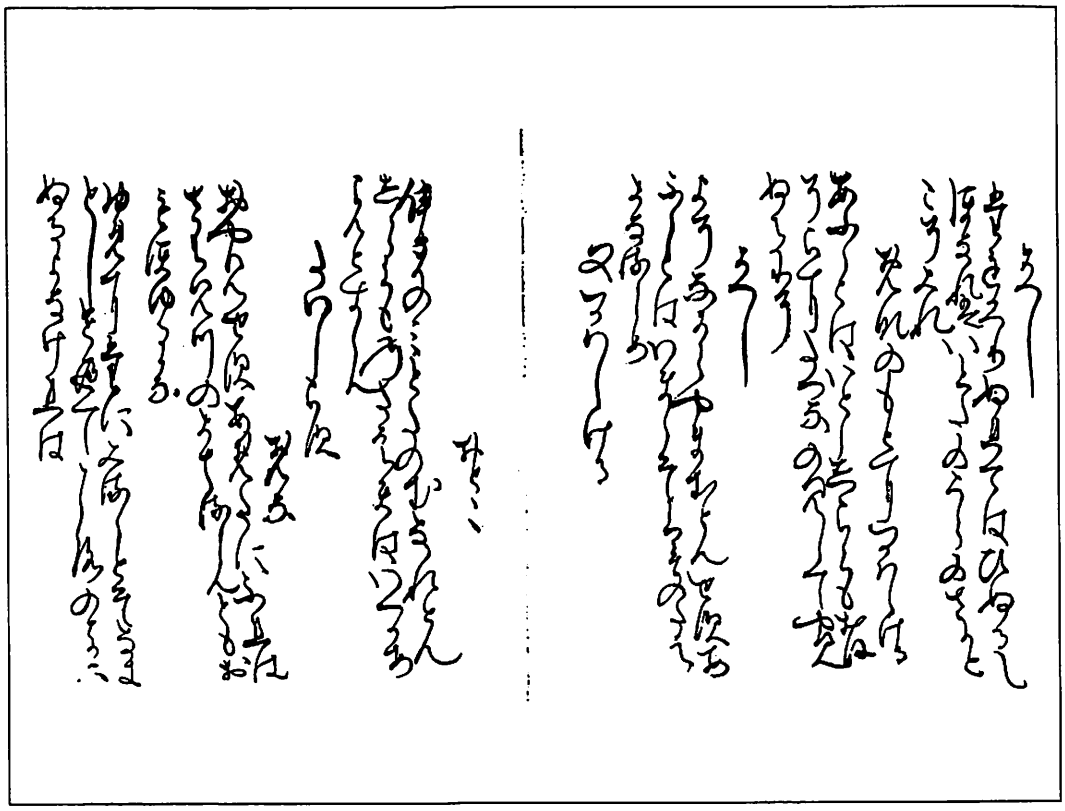
(14)　きみやそれありしつらさのたれなれは
うらみけるさへけふはくやしき



12オ　12ウ

(15)まとろまぬかへにも人を見つ」るかなまさしからなんはるの」よ
のゆめ
あひしりてはへりけるひと〳〵の」もとにかへりこと見むとて」
つかはしける
もとよしのみこ
くや〳〵とまつゆふくれといまはと」てかへるあしたといつれま
され」り
かへし
ゆふくれはまつにもかゝる」しらつゆのかへるあしたや」きえはゝ
つらん

(16)
紀乳母
かけたにも見えすなりぬる」山の井はあさきより又みつや」たえ
にし
かへし
平定文朝臣
あさしといふことをゆゝしみ」山の井はほりしにこりにかけ」は
見えぬそ
たいしらす
いくたひかいくたのかはに」たちかへりなみにわかみを」うちぬ
らすらん



13オ　　13ウ

かへし

たちかへりぬれてはひぬるし」ほなれはいくたのうらのさかと」こそみれ

おんなのもとにつかはしける

あふことはいとゝしらくもおほ」そらにたつなのみしてやみ」ぬはかりそ

かへし

よそなからやまむともせすあ」ふことはいましそくものたえ」まなるらめ

又つかはしける

おとこ

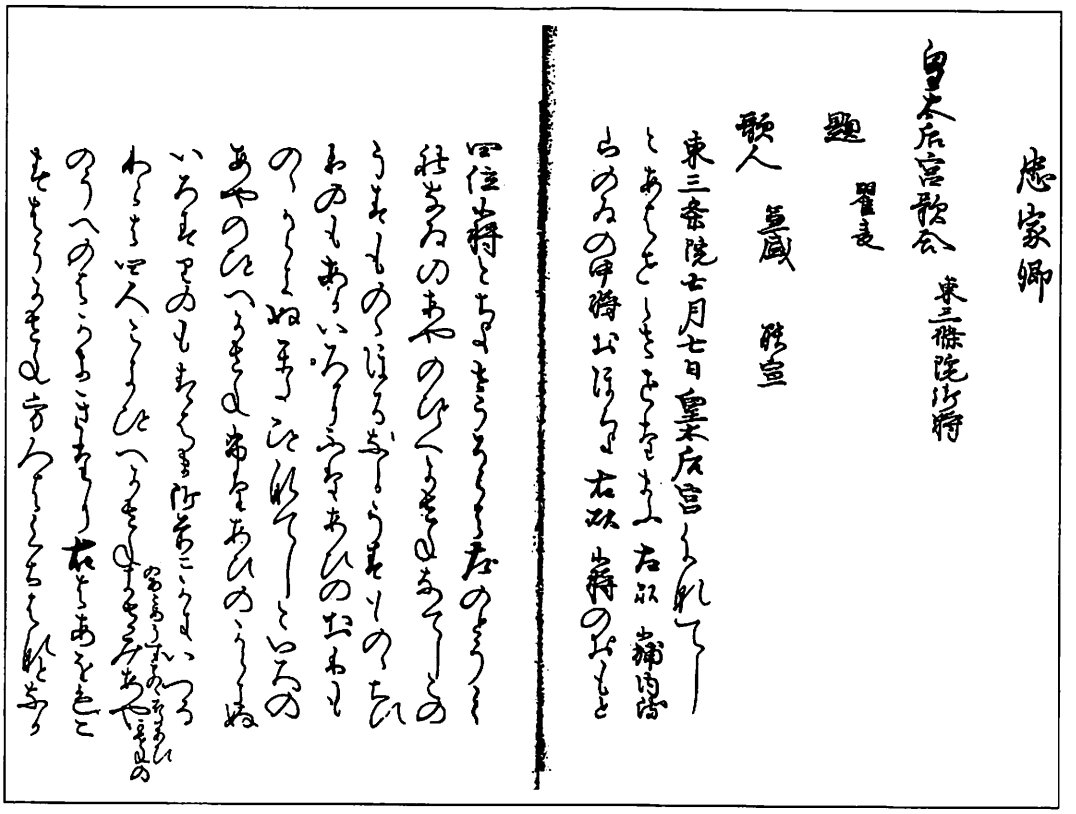
いまのみとたのむなれとも」しらくものたえまはいつかあ」らんとすらん

たいしらす

おんな

おやみせすあめたにふれは」さはみつのまさるらんともお」もほゆるかな

ゆめにたにみることそなき」としをへてこゝろのとかに」ぬるよなけれは



14ウ　14オ

忠家卿

(17)皇太后宮歌合 東三条院御時

題　罌粟

歌人　兼盛　能宣

東三条院七月七日皇太后宮になてし

こあはせゝさせたまふ　左頭　少輔内侍

山のゐの中将おほちよ　右頭　少将のおもと

四位少将こちよさうそくは左のとうく

れなゐのあやのひとへかさねなてしこの

うすものゝほそなかうすものゝちす

りのもあかいろにふたあひのおりも

のゝからきぬかたひとなてしこいろの

あやのひとへかさねふたあひのからきぬ

いろすりのもすはま御前にかきいつる

わらは四人こきひとへかさねきさみあや（のあこめうすものゝふたあひかさねの）

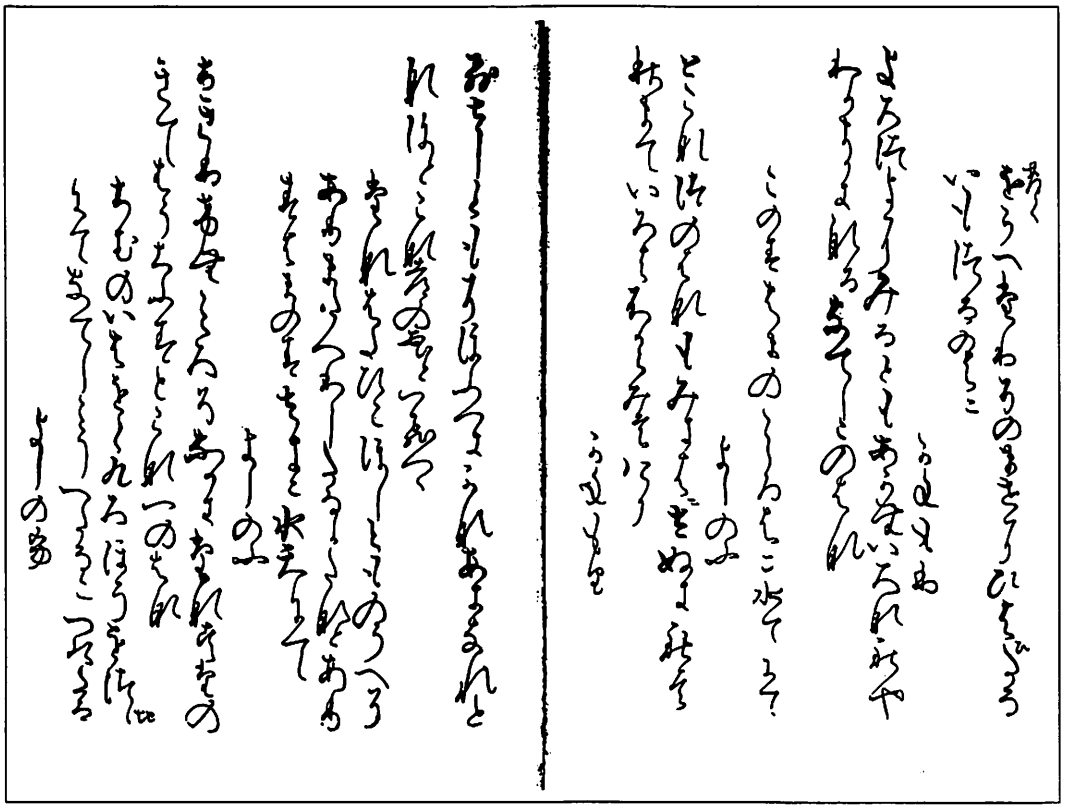
のうえのはかまきたり右はあを色に

すはうかさね方人はくちはなとなり

15オ

15ウ

左のすはまちひさきませゆひてな
てしこふたもと引うへたるにゆひ
つけたる
なてしこにけふは心をかよはしていか
にかすらんひこほしのそら
ときのまにかすとおもへとたなはたにかつ
をしまるゝなてしこのはな
すはまのつるのくひにゆひつけた
りける
かすしらぬまさこをふめるあしたつは
よはひをきみにゆつるとそみる
るりのつほにはなさしたるたいの
はまにあしてしてぬへる（しきものに）
なてしこのはなのかけさすかはへにはみと
りのいろもみえすそありける
おなしすはまのなてしこにつけたる
たなはたやわきてそむらんなてしこの
はなのこなたはいろのまされる
むしのねにつけたる（子）
松むしのしきりにこゑのきこゆるはちと
せかさぬる心なりけり
右のすはまにませゆひてなてしこ



16オ　16ウ

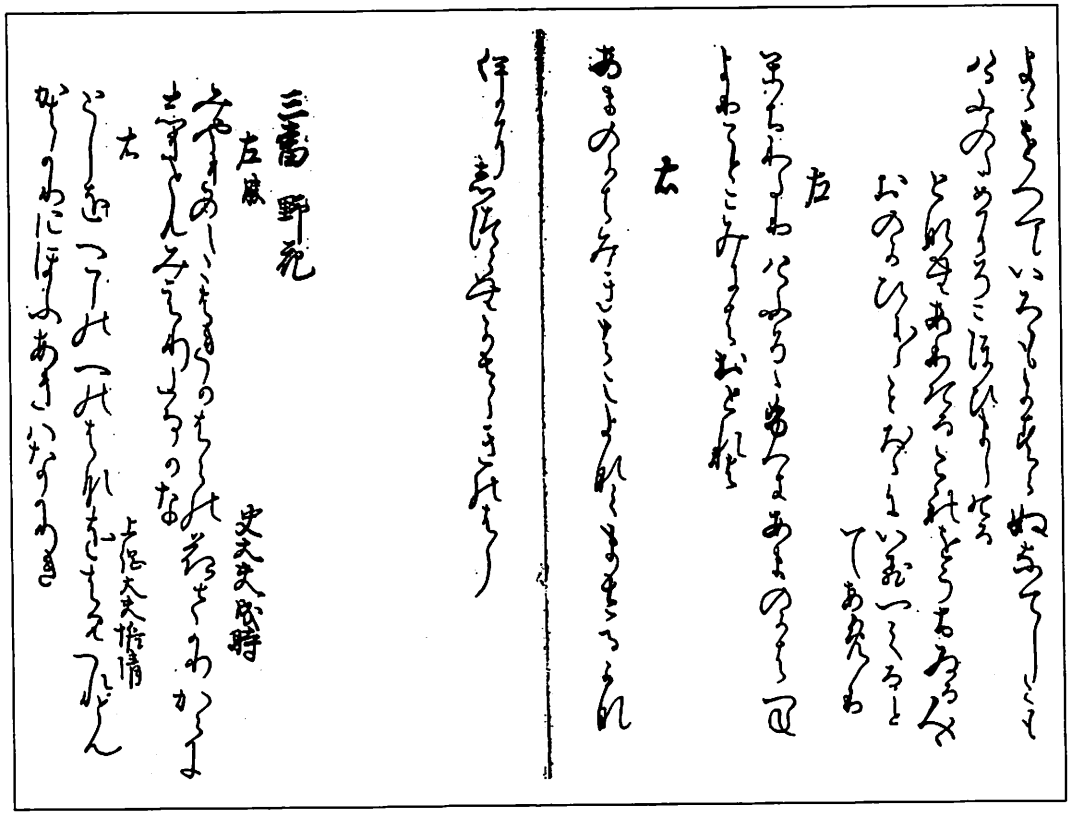
をうへたりそのませにひはたる
いもつるのはに
かねもり

よろつよにみるともあかむいろなれや
わかまかきなるなてしこのはな
そのすはまのこゝろはに水てにて
よしのふ

とこなつのはなもみきはさぬきれは
秋まていろはふかくみえけり
かねもり

ひさしくもにほふへきかなあきなれと
なほとこのなつの花といひつゝ
たなはたひこほしくものうへに
ありまたつりしたるかたなとあり
すはまのすさきに水てにて
よしのふ

ちきりけむこゝろそなかきたなはたの
きてはうちふすとこなつのはな
ちむのいはをゝくろほうをつゝ
にてなてしこうへたるにつけたる
よしのふ



17オ　17ウ

よゝをへていろもかはらぬなてしこも
けふのためにそにほひましける
となむありけるこれをうちゐる人く
おのかひき〳〵こゝろ〳〵にいひつくると
てあめり

左

かちわたりけふそゝふへきあまのかはつね
よりことにみきはおとれは

右

あまのかはみきはこよなくまさるかな

いかにしつらむかさゝきのはし

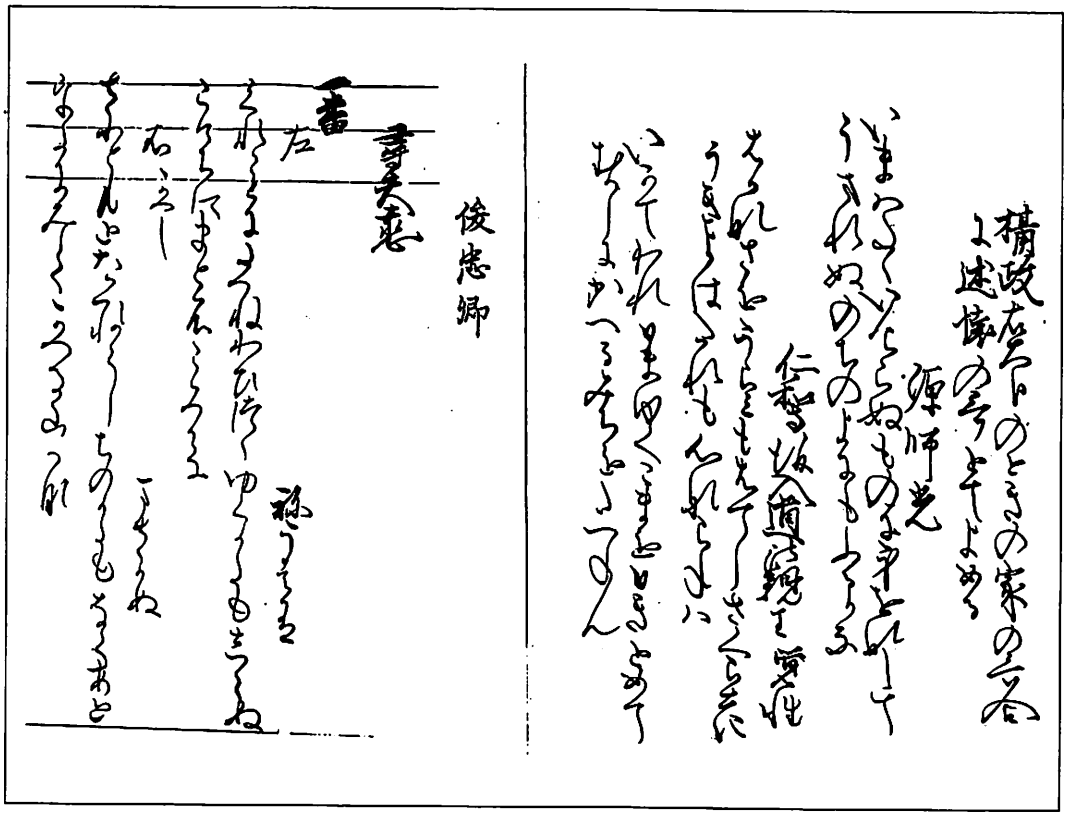
(18)三番　野花

左勝　史大夫成時

みやきのゝこはきかはらの花さかりからに
しきともみえわたるかな

右　上総大夫惟清

としをへてのへのはなをは見つれとも
かはかりにほふあきはなかりき

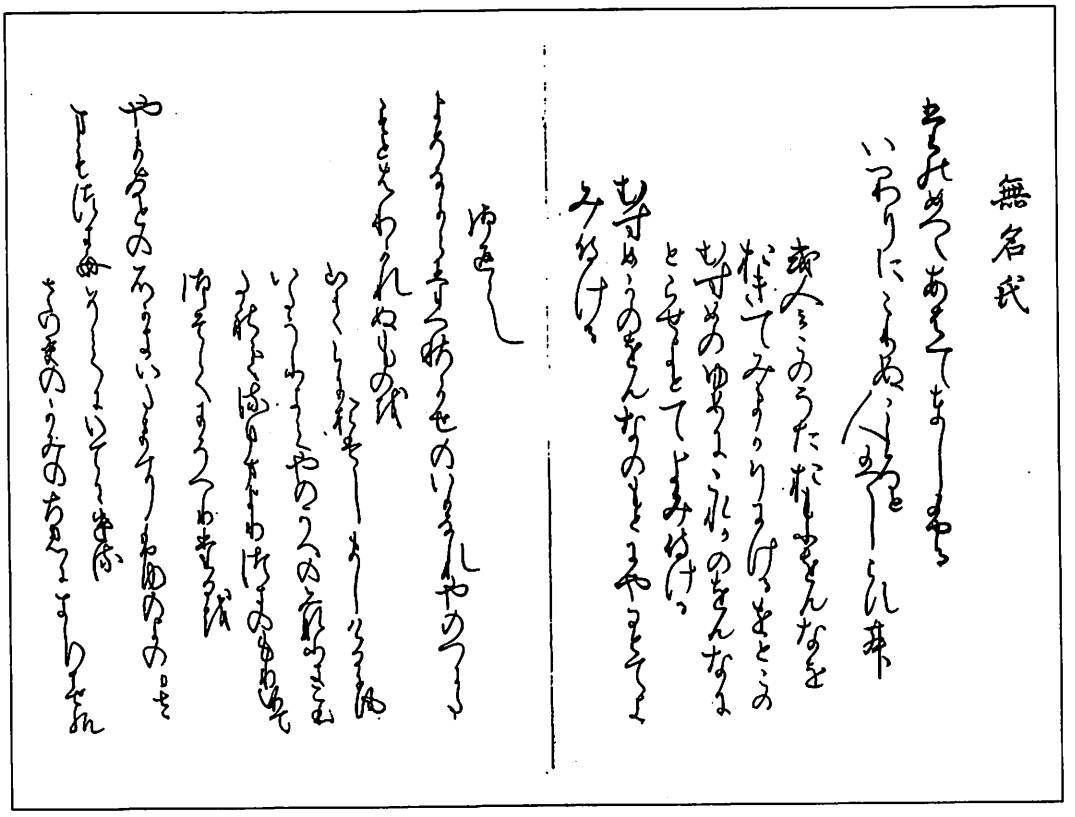


18オ

18ウ

(19) 摂政右大臣のときの家の歌合
に述懐の歌とてよめる
源師光
いまはたゝいけらぬものに身をなして
うまれぬのちのよにもふるかな
仁和寺後入道法親王 覚性
はかなさをうらみもはてしさくら花
うきよはたれも心ならねは
いかてわれひまゆくこまをひきとめて
むかしにかへるみちをたつねん

俊忠卿
(20) 尋失恋
一番
左　ねうはう
くれことにたつねわひつゝゆくかたもしらぬ
こけちにまとふころかな
右かへし　まさかぬ
さりともとたつねこしちのかたもなくあと
をたにみてかへる山かな



19オ

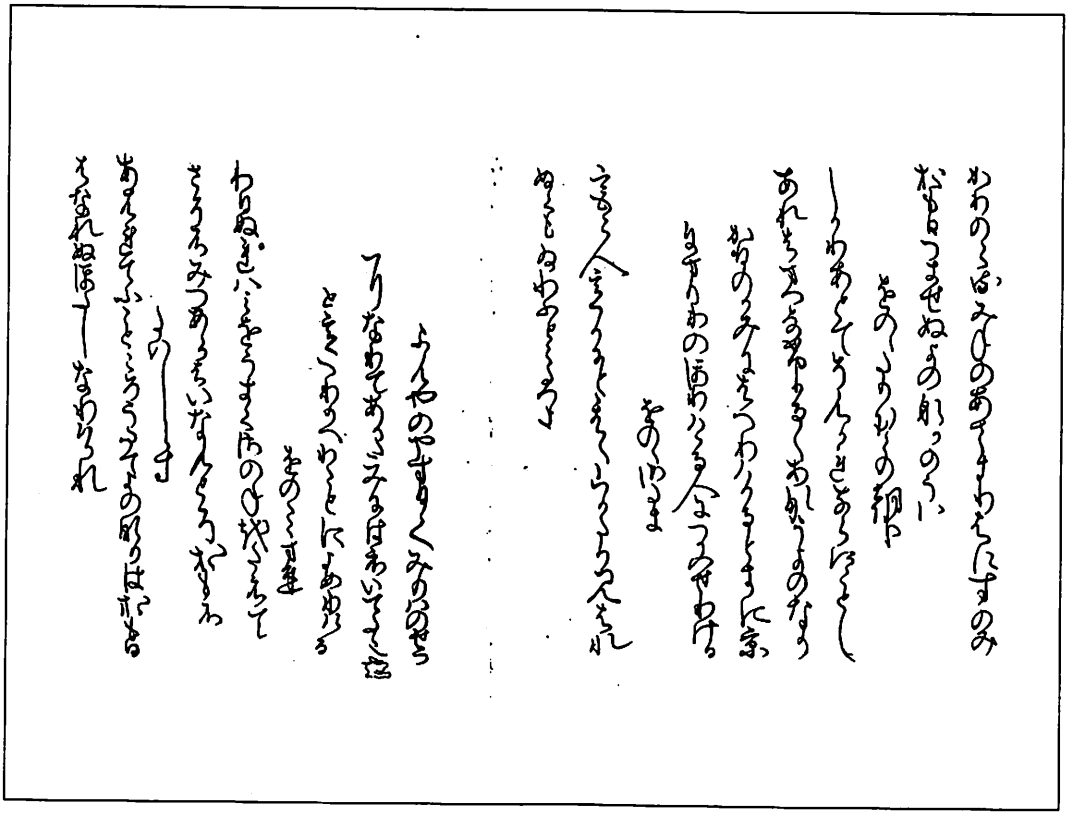
19ウ

無名氏

(21)たのめつゝあはてとしふる
いつわりにこりぬこゝろを
人はしらなむ(?)

(22)或人云このうたおもふをんなを
おきてみまかりにけるをとこの
むすめのゆめにこれかのをんなに
とらせよとてよみ侍ける
むすめかのをんなのもとにやるとてよ
み侍ける

(23)御返し
よそなからたつ秋かせのいかなれやのへにた
もとはわかれぬものを
山てらにおはしましけるに風
いたうふきてやのうへのみなふきこほ
たれたる(?)ひまよりつきのもりいりて
御そてにうつりたるを
やまさとのふかきいたまにふゆのよのかさ
まもつきもそてにいてにける
さい宮のかみの大夫にきこえさせ給



20オ

20ウ

(24)かりのくるみねのあさきりはれすのみ(?)
おもひつきせぬよのなかのうさ(?)

をのゝたかむらの朝臣

しかりあとてそむかれなくにことし(ママ)
あれはまつなけかるゝあなうよのなか
かひのかみにはへりけるときに京
にまかりのほりける人につかはせりける

をのゝさたき

宮こ人いかにとゝはゝ山かたかみはれ(ママ)
ぬくもゐわふとこたへよ(ママ)

ふんやのやすひてみかはのせう
になりてあかたみにはえいてたゝし[や]
といへりかへりことによめりける

をのゝこまち

わひぬれはみをうきくさのねをたえて
さそふみつあらはいなんとそおもふ

たいしらす

あはれてふことこそうたてよのなかはおもひ
はなれぬほたしなりけれ

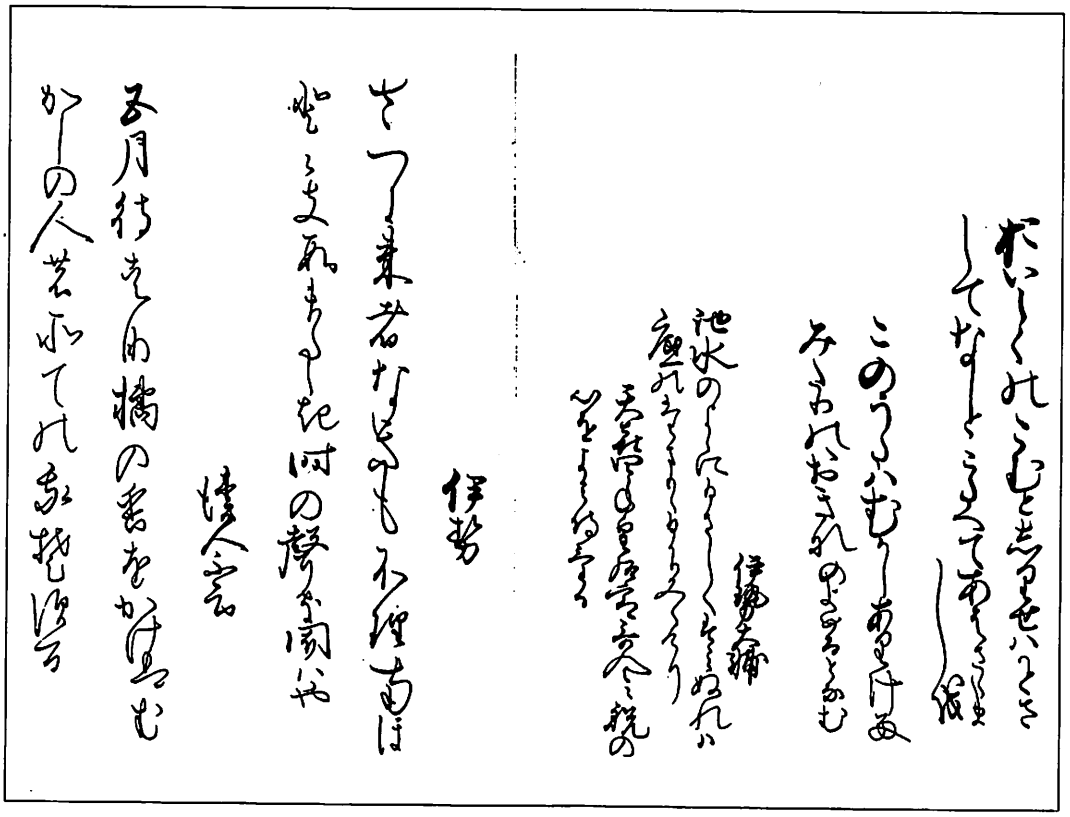
21オ

21ウ

(25)こひしねとするわさならしぬはたまの
夜るはすからに夢にみえつゝ
なみたかはまくらなかるゝうきねには
ゆめもさたかにみえすそ在ける
恋すれは我身はかけと成にけりさり
とて人にそはぬものゆへ
かゝり火にあらぬものからなそもかく
なみたのかはにうきてもゆらん

(26)きていはくえのうはそくはかりことを
なしてくにをかたふけむとすといふ

(27)すかねのあそん　(28)しのひあまり
秋かせにこゑを　をつるなみた
ほにあけてくる　を
ふねはあま　せきかへし
のとわたるふ(ママ)　おさふる袖よ
にさりける　うき名もら
すな

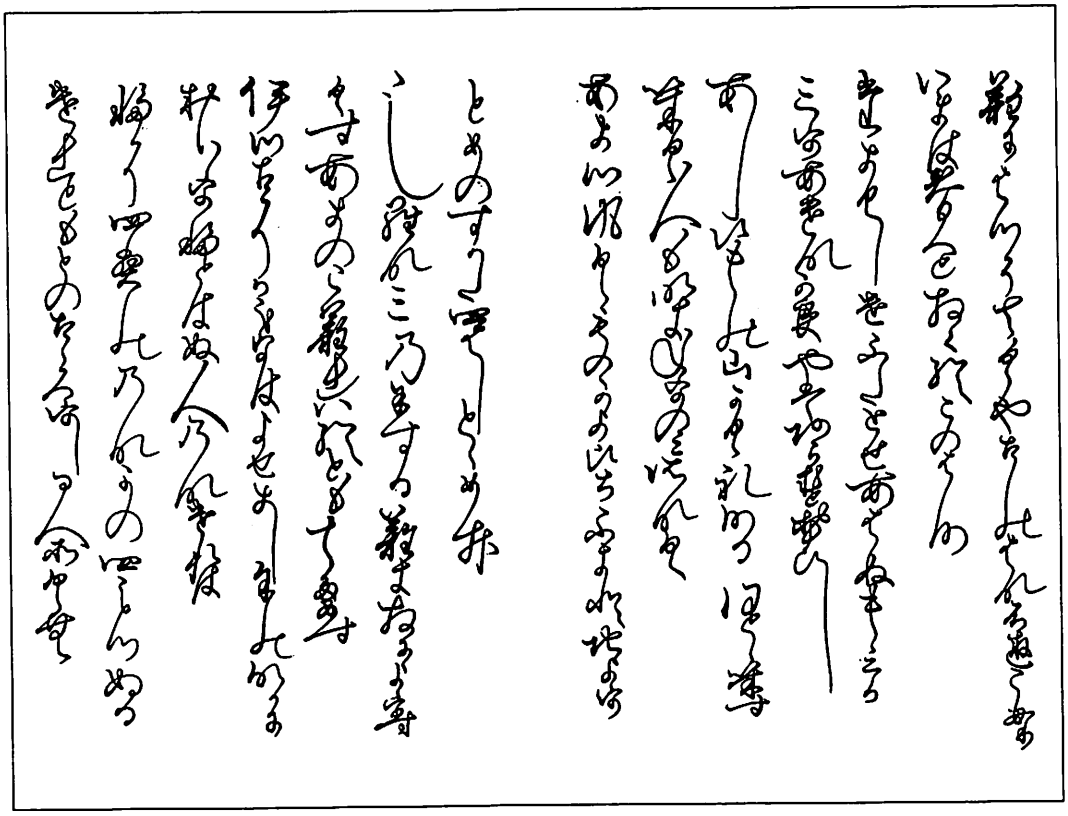


22オ　22ウ

(29)おいらくのこむとしりせはかとさ
してなしとこたへてあはさらま
しを
このうたはむかしありける
みたりのおきなのよめるとなむ

(30)　伊勢大輔
池水のよゝにひさしくすみぬれは
底のたまもゝひかりみえけり
天喜四年皇后宮歌合に祝の
心をよみ侍ける

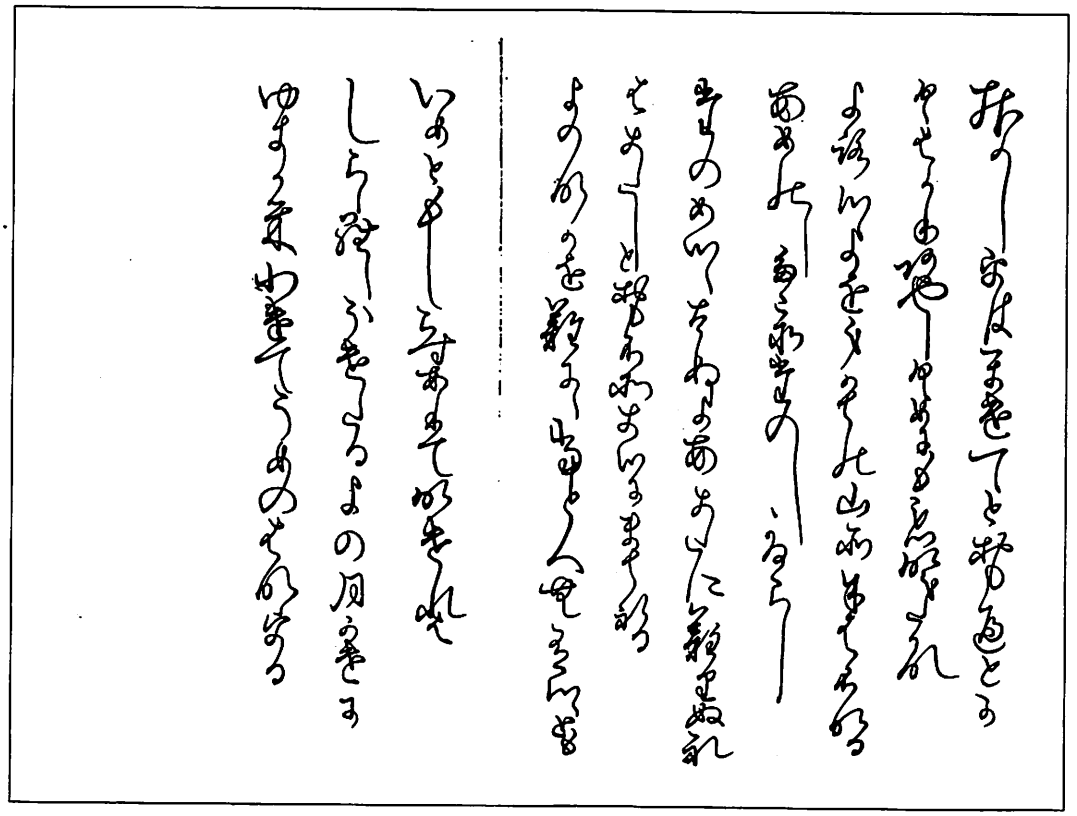
(31)　伊勢
さつき来者なきも不理南ほ
登々支数またしき時の声を聞はや
読人不知
五月待はな橘の香をかけはむ
かしの人のそてのかそする



23オ　23ウ

(32)なにはつにさくやこのはなふゆこもり
いまは春へとさくやこのはな
たまくしけふたとせあはぬきみか
みをあけなからやはあらむとおもひし
あしひきの山かくれなるほとゝきす
きく人もなきねをのみそなく
あまつ風くものかよひちふきとちよを

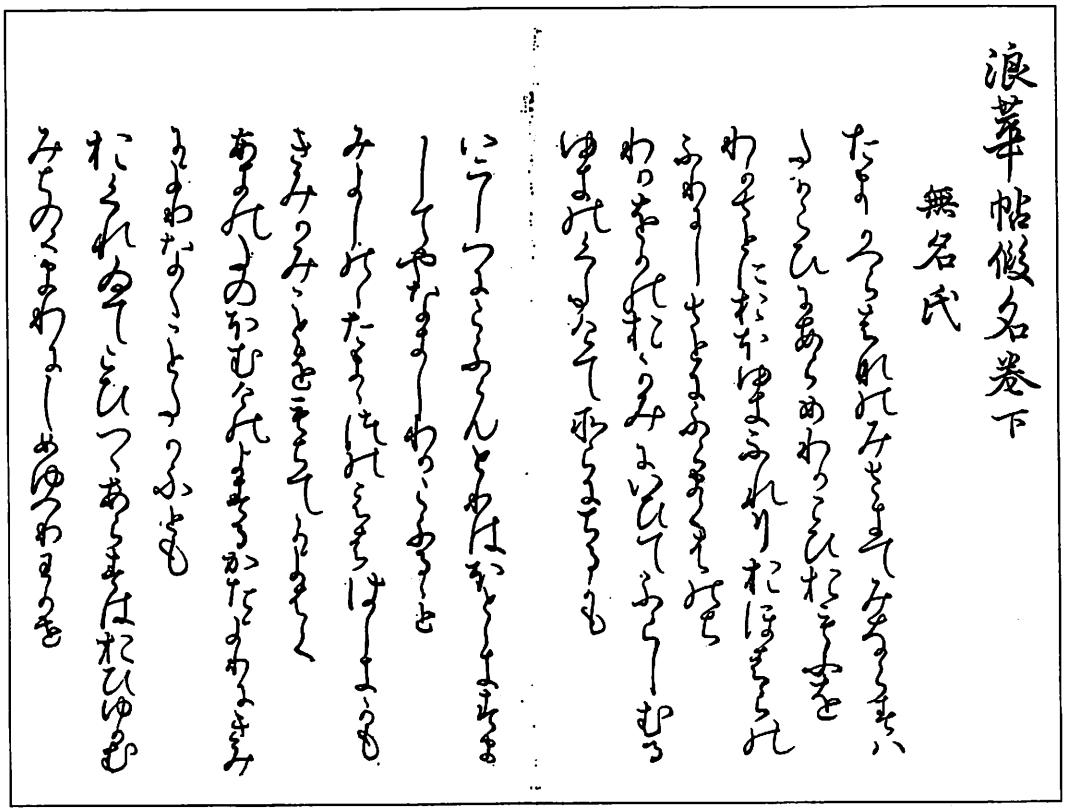
とめのすかたしはしとゝめむ
しらなみのよするなきさによをす
くすあまのこなれはやともさためす
いつこにか身をはよせましよのなかに
おいをいとはぬ人のなけれは
いにしへののなかのしみつぬる
けれともとのこゝろをしる人そくむ



24ウ　　24オ

むかしをはかけてとおもへとか
くはかりあやしくめにもみつなみたかな
よろつよをみかさの山そよはふなる
あめのしたこそたのしかるらし
たのめつゝこぬよあまたになりぬれ
はまたしとおもふそまつにまされる
よのなかをなにゝたとへむうつゝとも

いめともしらすありてなけれは
しらしらしゝらけたるよの月かけに
ゆきかきわけてうめのはなをる

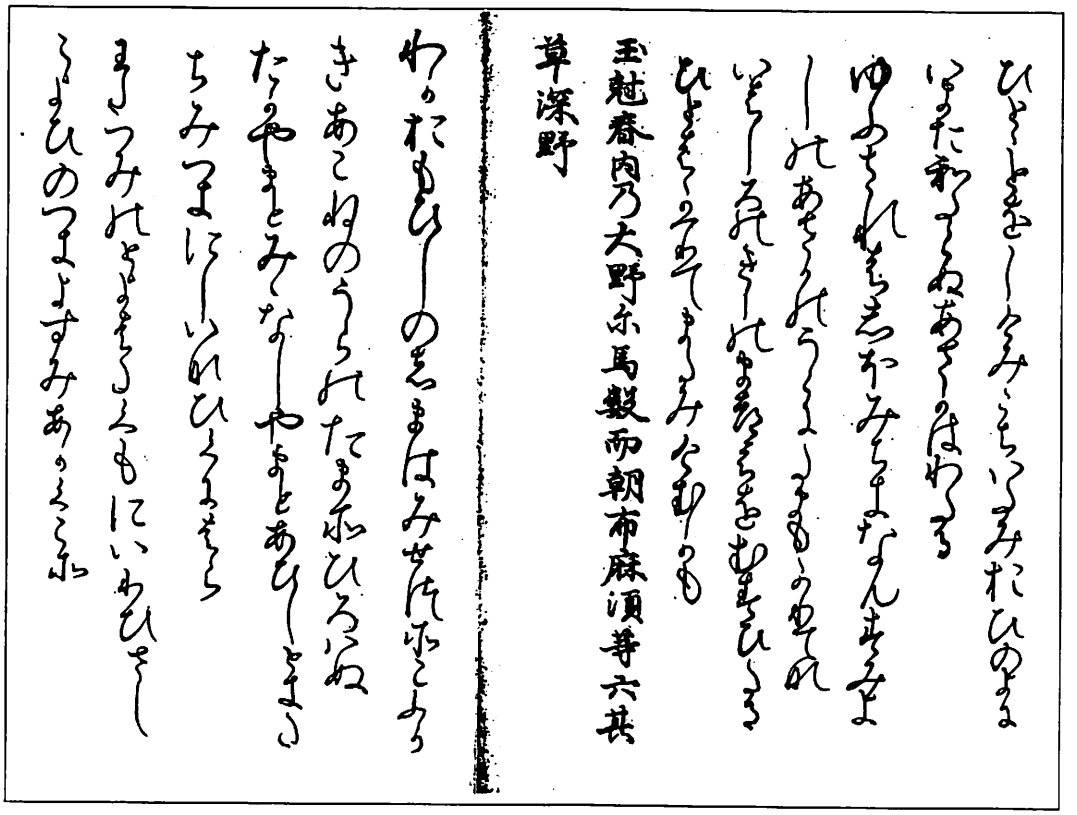


1ウ　　下1オ

無名氏

(33)たまかつらはなのみさきてみならすは
たかこひにあらめわかこひおもふを
わかさとにおほゆきふれりおほはらの
ふりにしさとにふらまくはのち
わかをかのおかみにいひてふらしむる
ゆきのくたけてそらにちるかも

いにしへにこふらんとりはほとゝきすま
してやなきしわかこふること
みよしのゝたまゝつのえははしきかも
きみかみことをもちてかよはく
あきのたのほむけのよするかたよりにきみ
によりなゝことたかふとも
おくれゐてこひつゝあらすはおひゆかむ
みちのくまわにしめゆへりわかせ

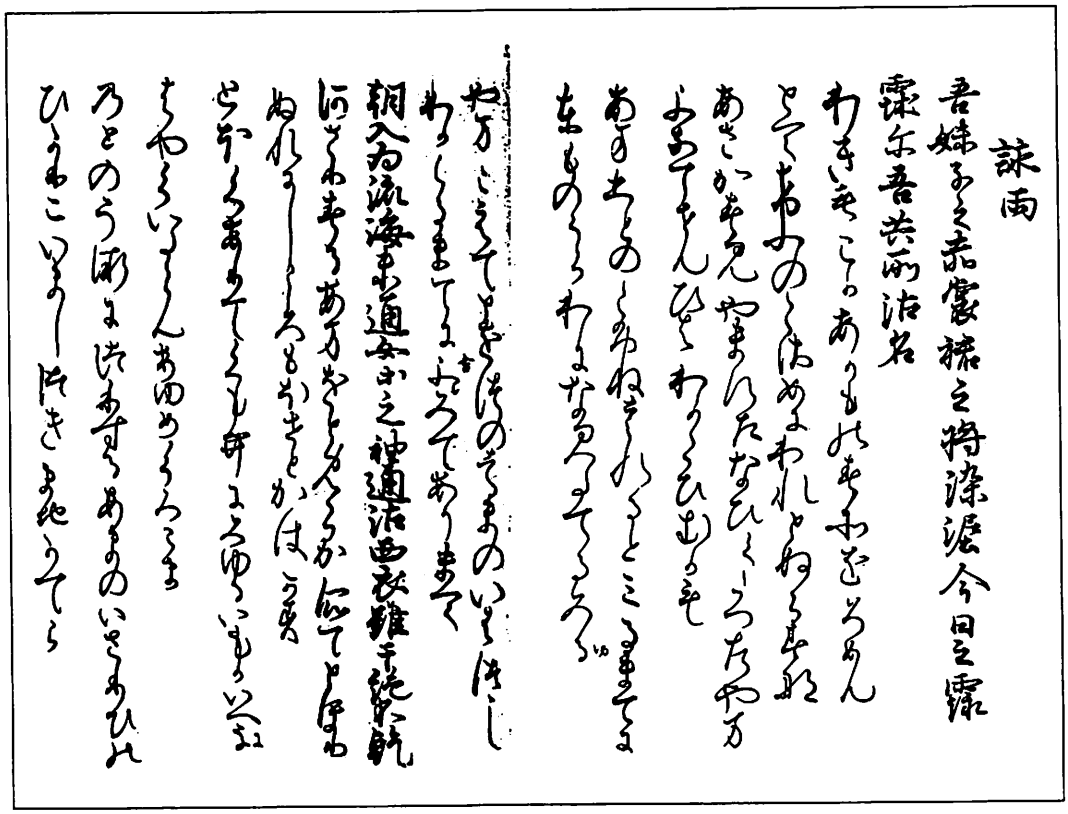


2オ

2ウ

ひとことをしけみこちいたみおひのよに
いまたわたらぬあさかはわたる
ゆふされはしほみちきなんすみよ
しのあさかのうらにたまもかりてな
いはしろのきしのまつえをむすひたる
ひとはかへりてまたみけむかも
玉尅春内乃大野尓馬数而朝布麻須等六其
草深野

わかおもひしのしまはみせつそこふか
きあこねのうらのたまそひろはぬ
たかやまとみゝなしやまとあひしときた
ちみつきにしいなひくにはら
わたつみのとよはたくもにいりひさし
こよひのつきよすみあかくこそ



3オ

3ウ

詠雨

吾妹子之赤裳裙之将染涅今日之霖

霖尓吾共所沾名

わきもこかあかものすそをそめん

とてけふのこさめにわれとぬらすな

あさかすみやますたなひくたつたやま

ふなてせんひはわかこひむかも

あまひとのこふねはなるとみるまてに

とものうらわになみたてるみる

やまこえてとをつのはまのいはつゝし

わかくるまてにふゝみてありまて

朝入為流海未通女等之袖通沾西衣雖干絶不乾

あさりするあまをとめらかそてとほり

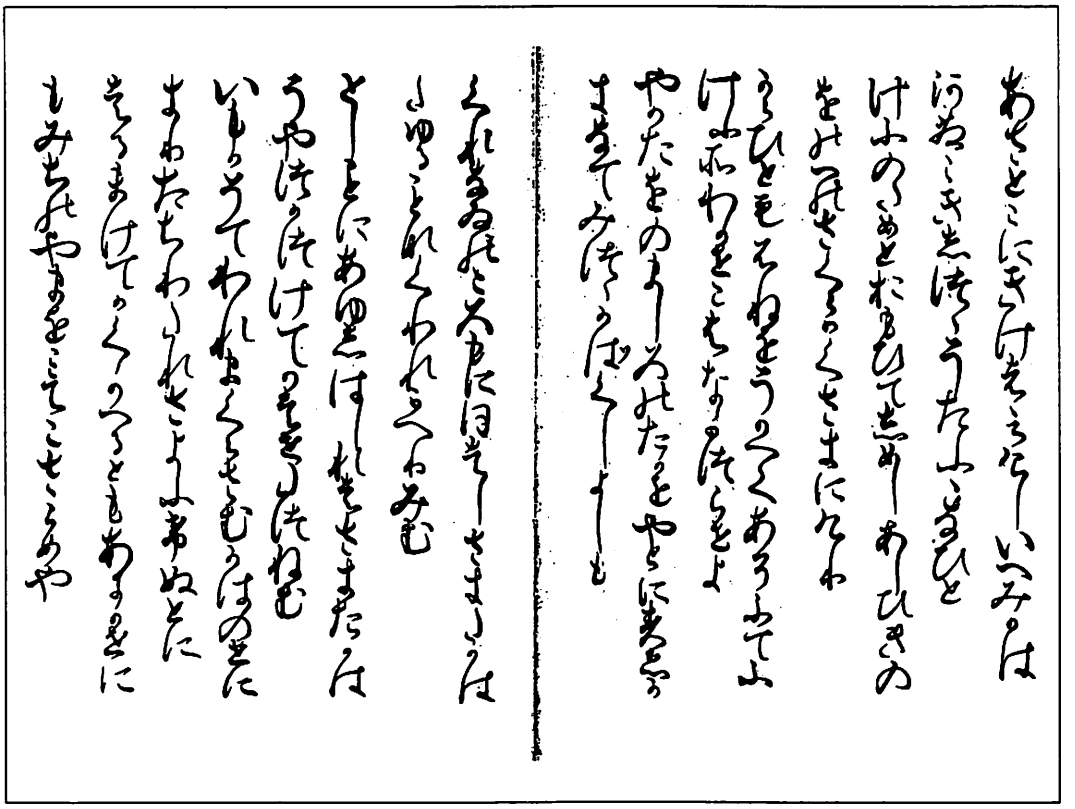
ぬれにしころもほせとかはかす

とほくありてくもゐにみゆるいもかいへな

はやくいたらんあゆめくろこま

のとのうみにつりするあまのいさりひの

ひかりにいましつきまちかてら

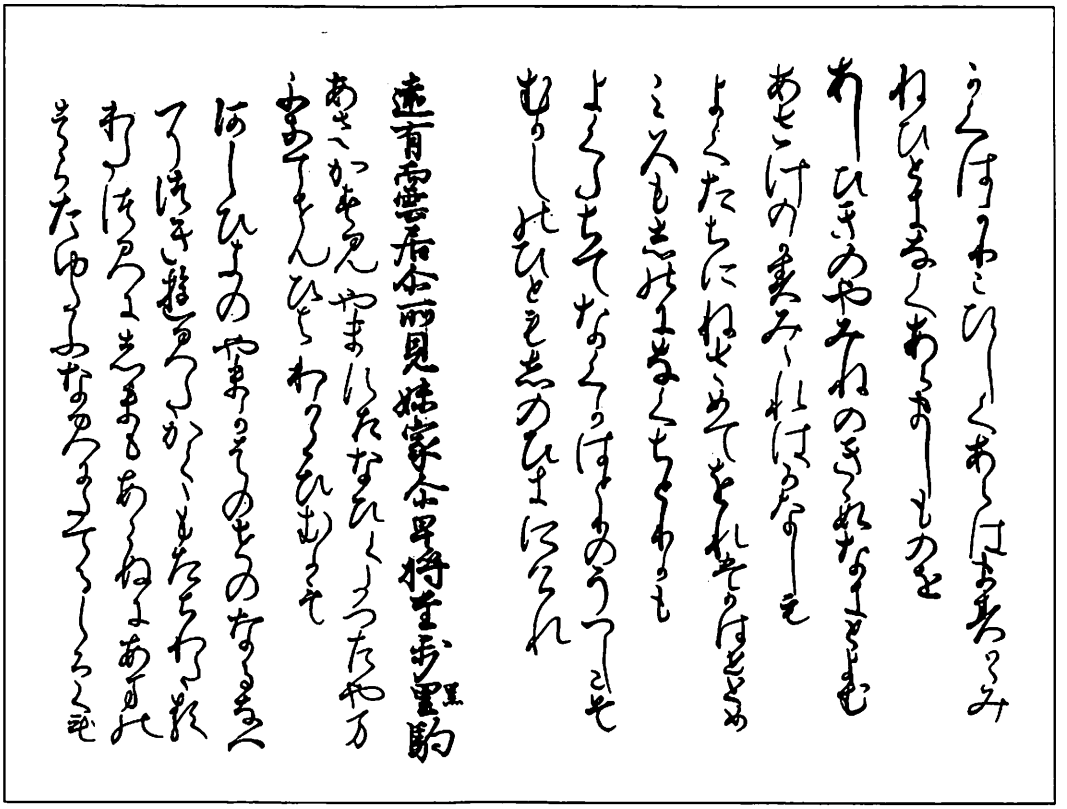


4オ

4ウ

あさとこにきけはゝる(?)けしいつみかは
あさこきしつゝうたふゝなひと
けふのためとおもひてしめしあしひきの
をのへのさくらかくさきにけり
からひともふねをうかへてあそふてふ
けふそわかせこはなかつらせよ
やかたをのましろのたかをやとにすゑか
きなてみつゝかはくしよしも

くれなゐのころもにほはしさきたかは
たゆることなくわれかへりみむ
としことにあゆしはしれはさきたかは
うやつかつけてかはせたつねむ
いもかそてわれまくらさむかはのせに
きりたちわたれさよふけぬとに
はるまけてかくかへるともあきかせに
もみちのやまをこえこさらめや

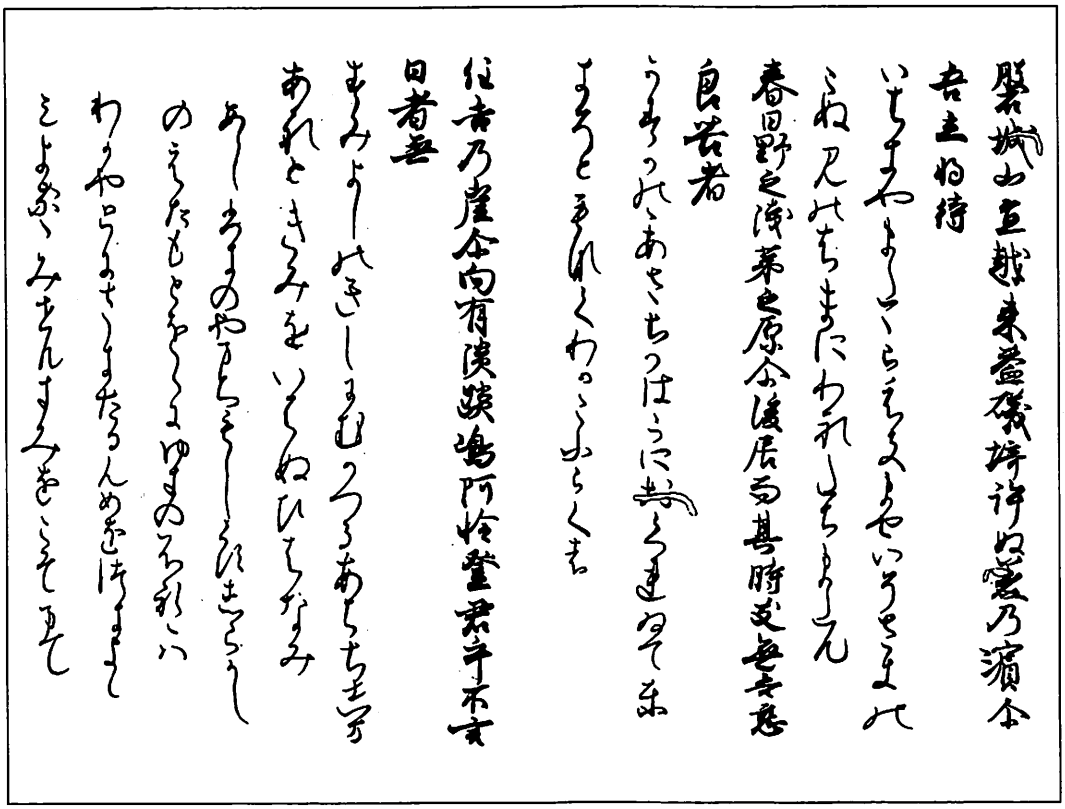


5オ

かくはかりこひしくあらはますかゝみ
ねひときなくあらましものを
あしひきのやみねのきゝすなきとよむ
あさけのかすみゝれはかなしも
よくたちにねさめてをれはかはせとめ
こゝろもしのになくちとりかも
よくたちてなくかはとりのうへしこそ
むかしのひともしのひきにけれ

遠有而雲居尓所見妹家尓早将至歩里駒黒
あさかすみやますたなひくたつたやま
ふなてせんひはわかこひむかも
あしひきのやまかはのせのなるなへ
につきゆみたかくゝもたちわたる
わたつみにしまもあらぬにあまの
はらたゆたふなみにたてるしろくも

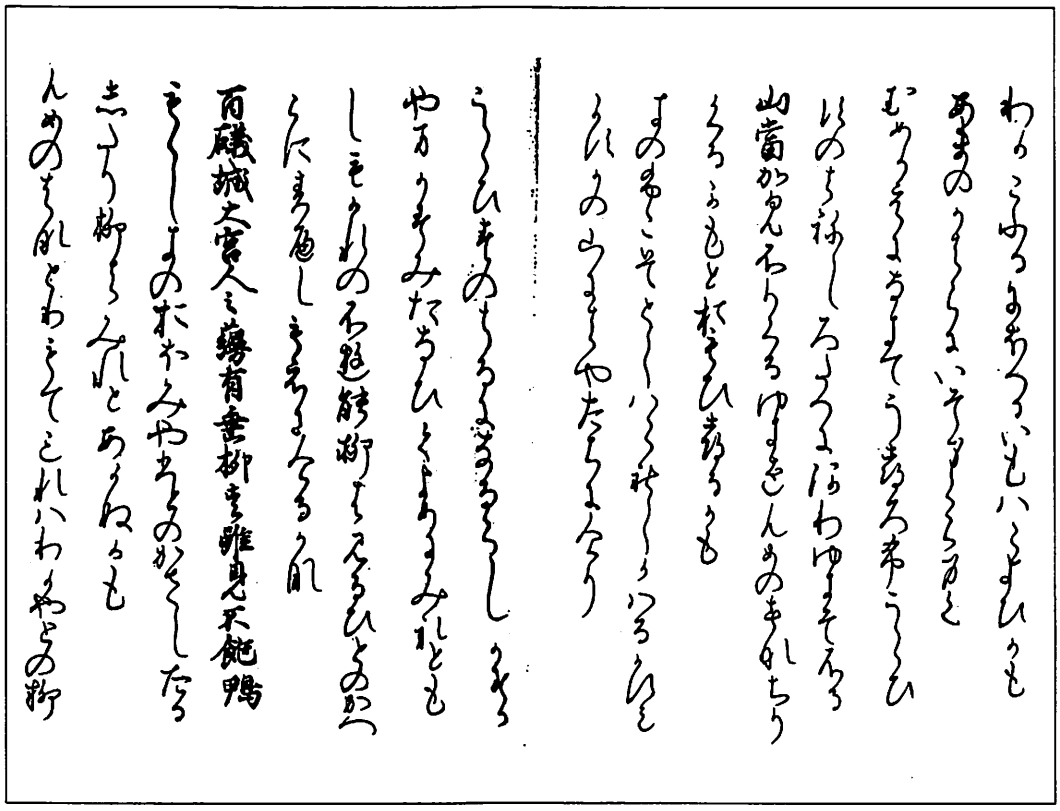
5ウ



6ウ　　6オ

磐城山直越来益磯崎許奴美乃浜尓
吾立将待
いはきやまたゝこえきませいそさきの
こぬみのはまにわれたちまたん
春日野之浅茅之原尓後居而其時友無吾恋
良苦者
かすかのゝあさちかはらにおくれゐて
きそともなくわかこふらくは

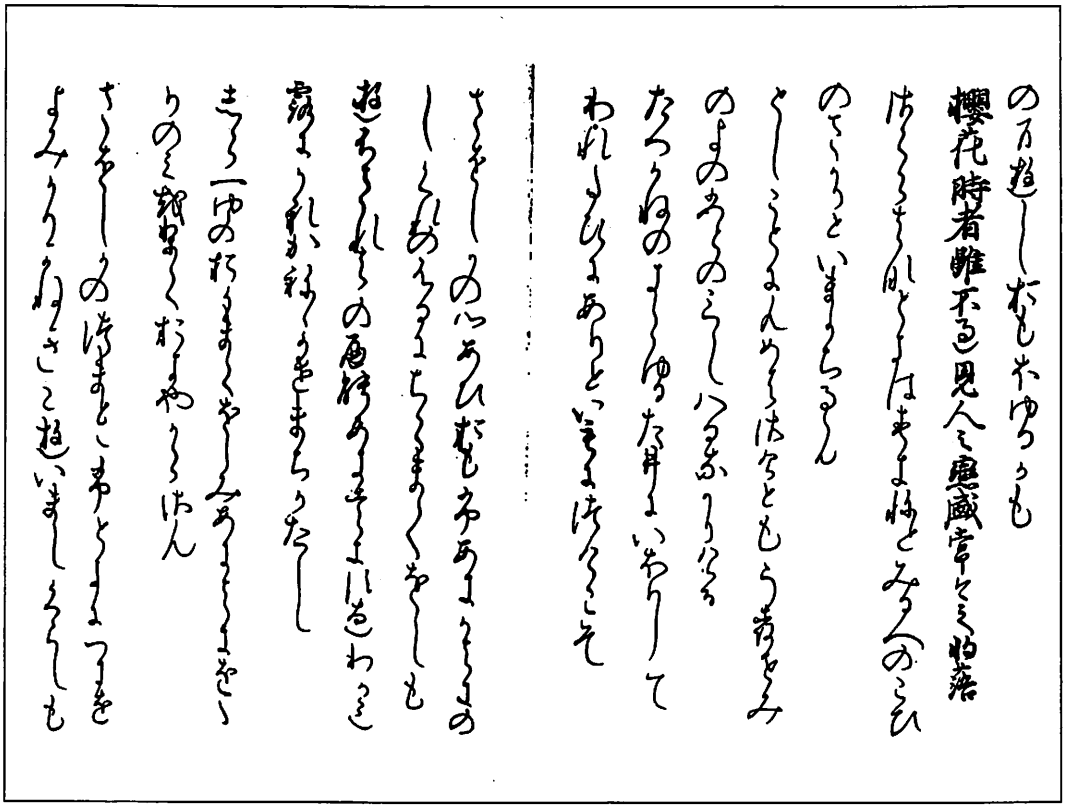
住吉乃崖尓向有淡路(?)島阿怜登君戸不言
日者無
すみよしのきしにむかへるあはちしま
あゝれ(ママ)ときみをいはぬひはなみ
あしひきのやまちもしらすしらかし
のえたもとをゝにゆきのふれゝは
わかやとにさきたるむめをつきよゝ
みよなくみせんきみをこそまて



7オ　7ウ

わかこふるにほへるいもはこよひかも
あまのかはらにいそまくらまく
むめかえになきてうつろふうくひ
すのはねしろたへにあわゆきそふる
山たかみふりくるゆきをむめのはなちり
くるかもとおもひつるかも
きのふこそとしはくれしかはるかすみ
かすかの山にはやたちにけり

うくひすのはるになるらしかすか
やまかすみたなひくよめにみれとも
しもかれのふゆの柳は見るひとのかつ
らにすへしもえにけるかな
百磯城大宮人之蕪有垂柳者雖見不飽鴨
もゝしきのおほみやひとのかさしたる
したり柳はみれとあかぬかも
むめのはなとりもてみれはわかやとの柳

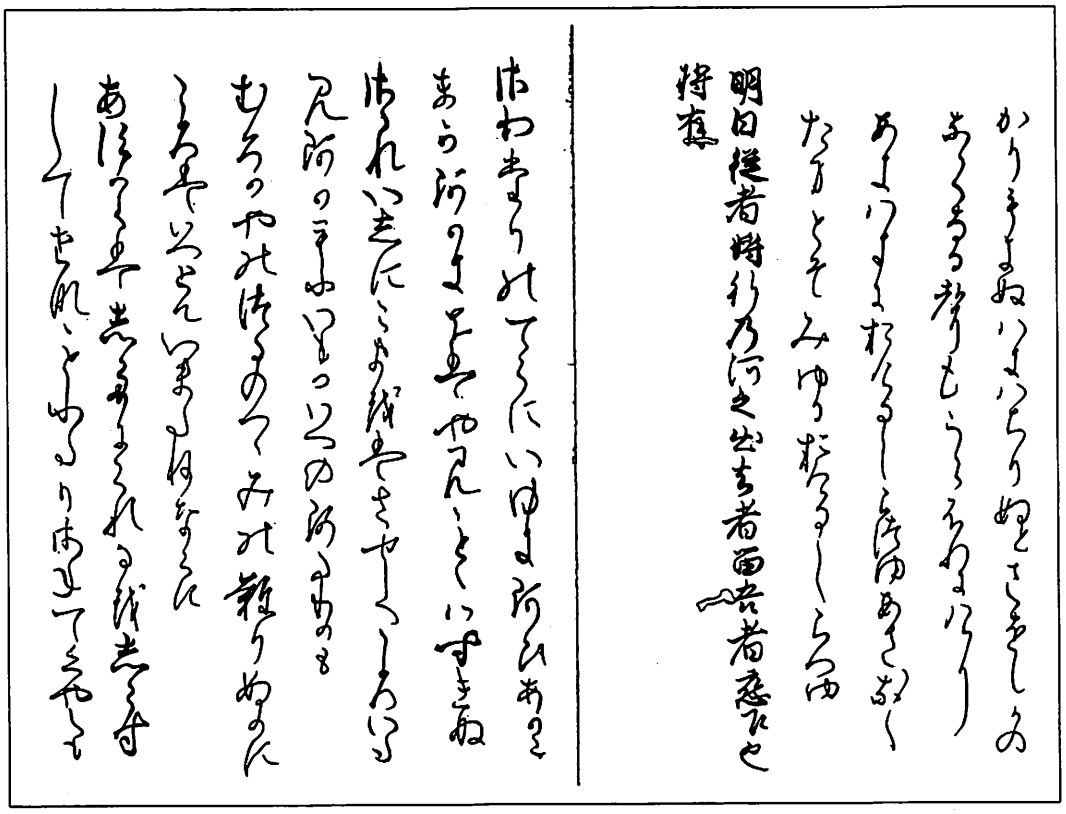


8オ

8ウ

のまゆしおもほゆるかも
桜花時者雖不過見人之恋盛常今之将落
さくらはなときはすきねとみる人のこひ
のさかりといまかちるらん
としことにむめはさけともうつせみ
のよのひとのみしはかなかりける
たつかねのきこゆるたゐにいほりして
われたひにありといもにつけこそ

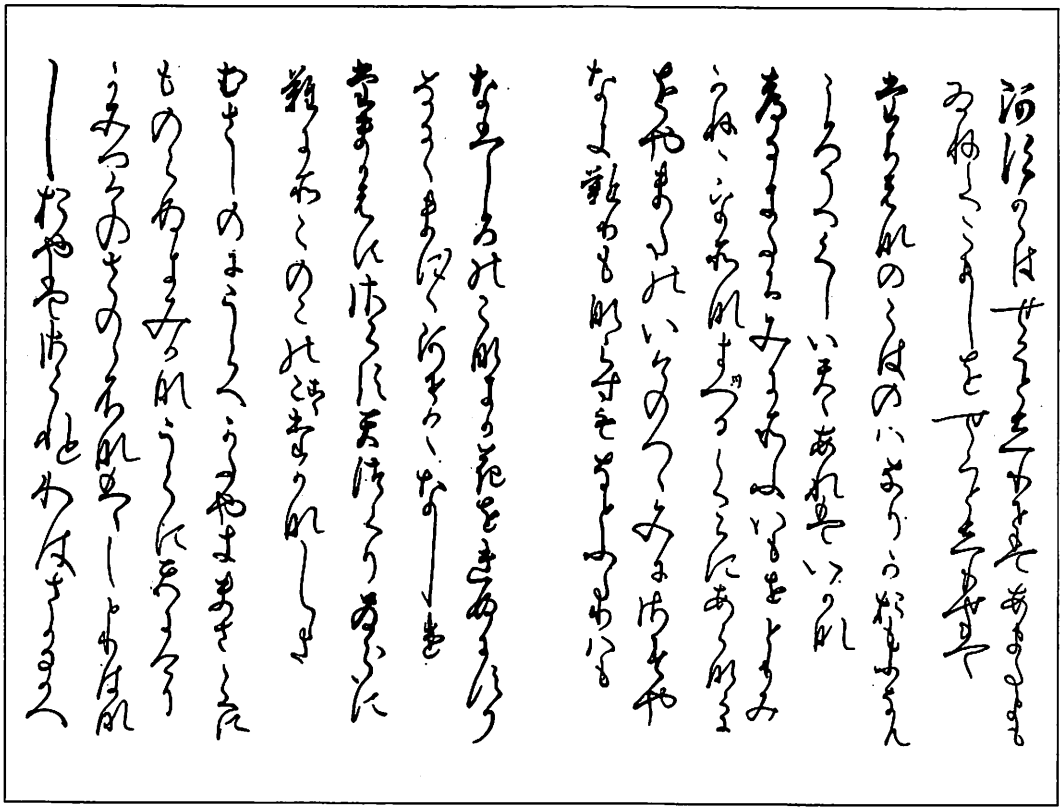
さをしかの心あひおもふあきかはきの
しくれのふるにちらまくをしも
ゆふされはのへのあきはきすゑわかみ
露にかれかねかせまちかたし
しらつゆのおかまくをしみあきはきを〻
りのみをりておきやからさん
さをしかのつまと〻ふときにつきを
よみかりかねきこゆいましくらしも



9オ　9ウ

かりもきぬはきはちりぬとさをしかの
なくなる声もうらふれにけり
あきはきにおけるしらつゆあさなく
たまとそみゆるおけるしらつゆ
明日従者将行乃河之出去者留吾者恋乍也
将有

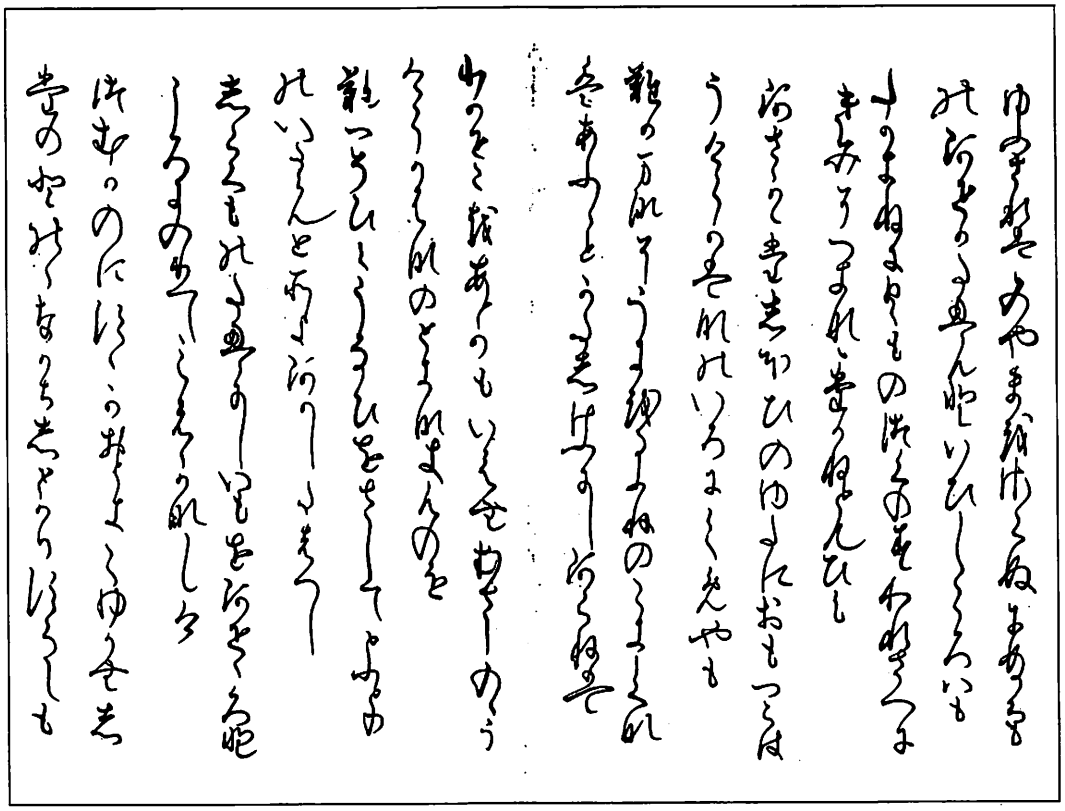
さわたりのてらにいゆきあひあかこ
まかあかきをはやみことゝはすきぬ
さゝれいしにこまをはさせてこゝろいた
みあかもふいもかいへのあたりかも
むろかやのつるのつゝみのなりぬかに
こゝろはいへともいまたねなくに
あすかゝはしたにこれるをしらす
してせなゝとふたりさねてくやしも



10ウ　　10オ

あすかゝはせくとしりせはあまたよも
ゐねてこましをせくとしりせは
たちはなのこはのはなりかおもふなむ
こゝろうつくしいてゝあれはいかな
つるきたちみにそふいもをとりみ
かねゝをそなきへるてこにあらなくに
をやまたのいけのつゝみにさすや
なきなりもならすもなとふたりはも

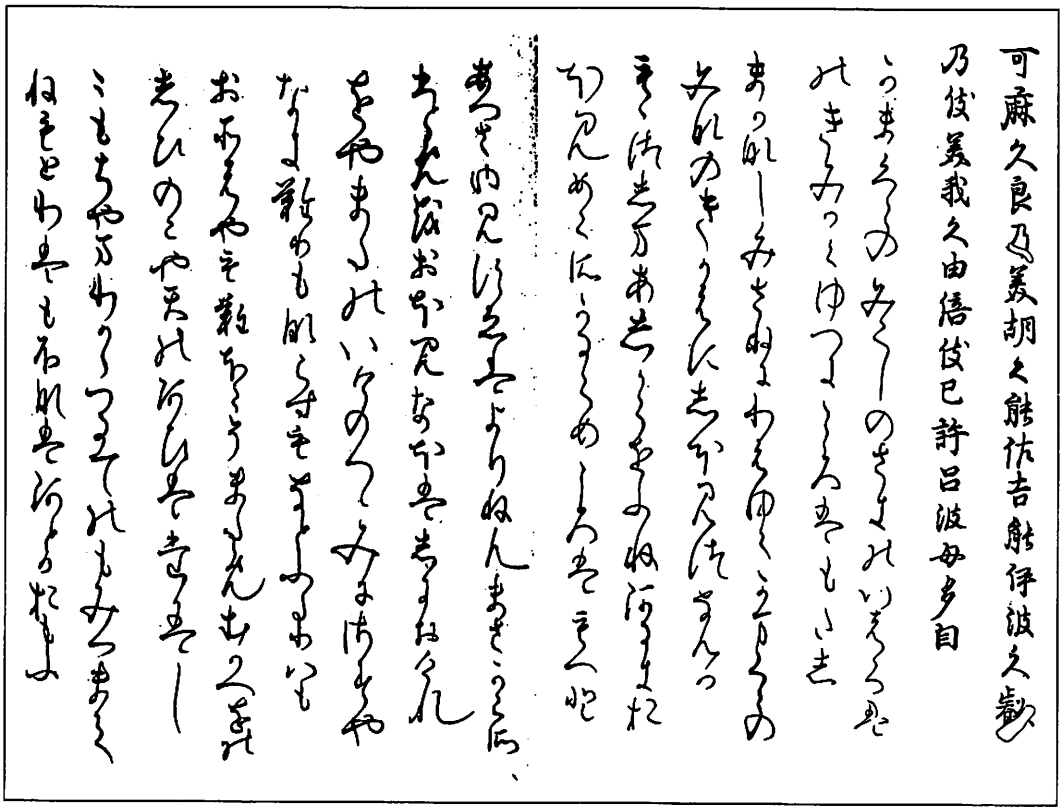
なはしろのこなきか花をきぬにすり
なるゝまに〳〵あせかゝなしけ
たまかはにさらすてつくりさら〳〵に
なにそこのこのこたかなしき
むさしのにうらへかたやきまさてに
ものらぬきみかなうらにてにけり
かみつけのさのゝふなはしとりはな
しおやはさくれとわはさかるかへ



11オ　11ウ

ゆふされはみやまをさらぬにぬくも
のあせかたえんといひしころはも
たかきねにくものつくのすわれさへに
きみにつきなゝたかねともひて
あさかゝたしほひのゆたにおもへらは
うけらかはなのいろにてめやも
なかまなにうきをるふねのこきくな
はあふことかたしけふにしあらねは

わかせこをあとかもいはむむさしのゝう
けらかはなのときなきものを
なつそひくうなひをさしてとふとり
のいたらんとそよあかしたはへし
しらくものたえにしいもをあせゝろと
こゝろにのりてこゝはかなしけ
つむかのにすゝかおときこゆかむし
たのとのゝなかちしとかりすらしも



12オ　12ウ

可麻久良乃美胡之能佐吉能伊波久叡
乃伎美我久由倍伎己許呂波母多自
かまくらのみこしのさきのいはくえ
のきみかくゆへきこゝろはもたし
まかなしみさねにわえゆくかまくらの
みなのきかはにしほみつなんか
もゝつしまあしからをふねあるきお
ほみめこそかるらめこゝろはもへと

あつさゆみすゑはよりねんまさかこそ
ひとめをおほみなほはしにおけれ
をやまたのいけのつゝみにさすや
なきなりもならすもなとふたりはも
おそはやもなほこそまためむかつをの
しひのこやてのあひはたかはし
こもちやまわかゝへるてのもみつまて
ねもとわはもふなはあとかおもふ

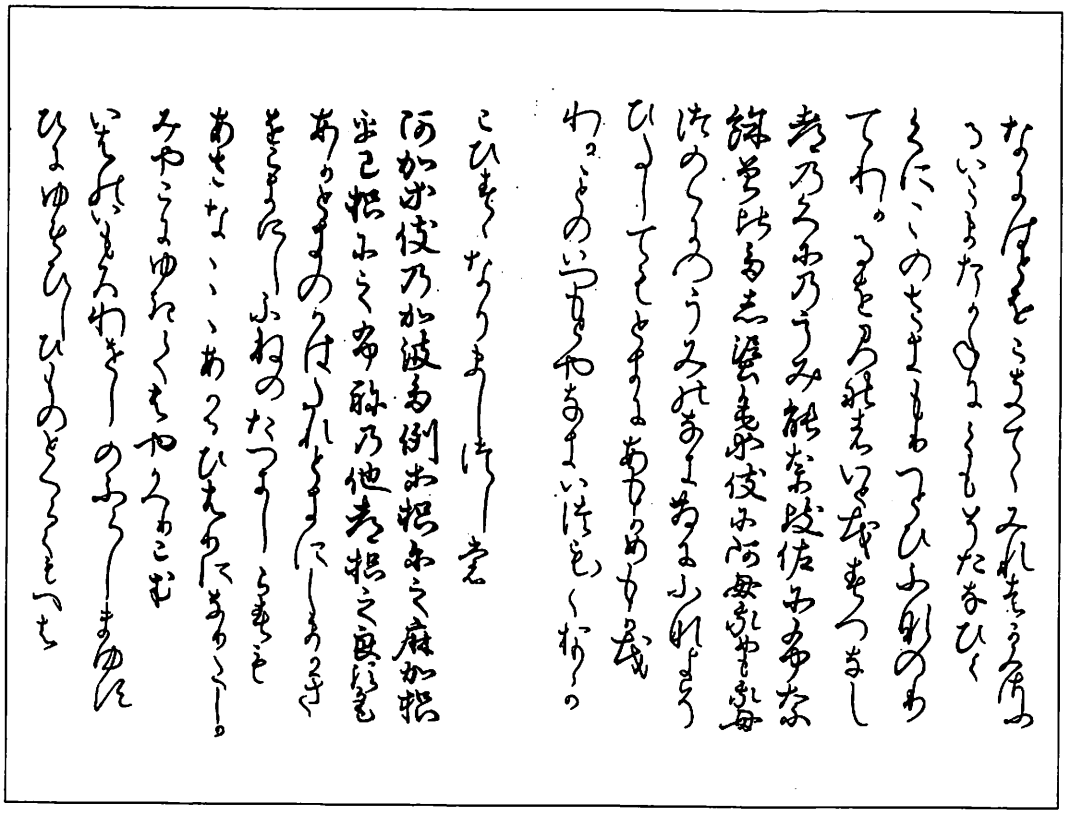
13オ

13ウ

ぬまふたつかよはとりかせあかこゝろ
ふたゆくなもとなよもはりそね
ひとみなのことはたゆともはにしなのい
しゐのてこかことなたえそね

うなはらのゆたけきみつゝあしか
ちるなにはにとしはへぬへくおもほゆ

海原乃由多気伎見都都安之我知流
奈尓波尓之(?)波倍奴倍久於毛保由
なにはつにみふねおろすゑやそかぬ
きいまはこきぬといもにつけこそ
さくらはないまさかりなりなにはの
うみおしてるみやにきこしめすなへ
あめつちのかみをいのりてさとやぬ
きつくしのしまをさしてゆくわれは



14 オ

14 ウ

なにはとをこきてゝみれはかみさふ
るいこまたかねにくもそたなひく
くに〳〵のさきもりつとひふなのり
てわかるを見れはいともすへなし
都乃久尓乃宇美能奈岐(?)佐尓布奈
余曽比多志塞毛等伎尓阿母我女毛我母
つのくにのうみのなきさにふなよそ
ひたしてもときにあもかめもかも
わかゝとのいつもとやなきいつも〳〵おもか

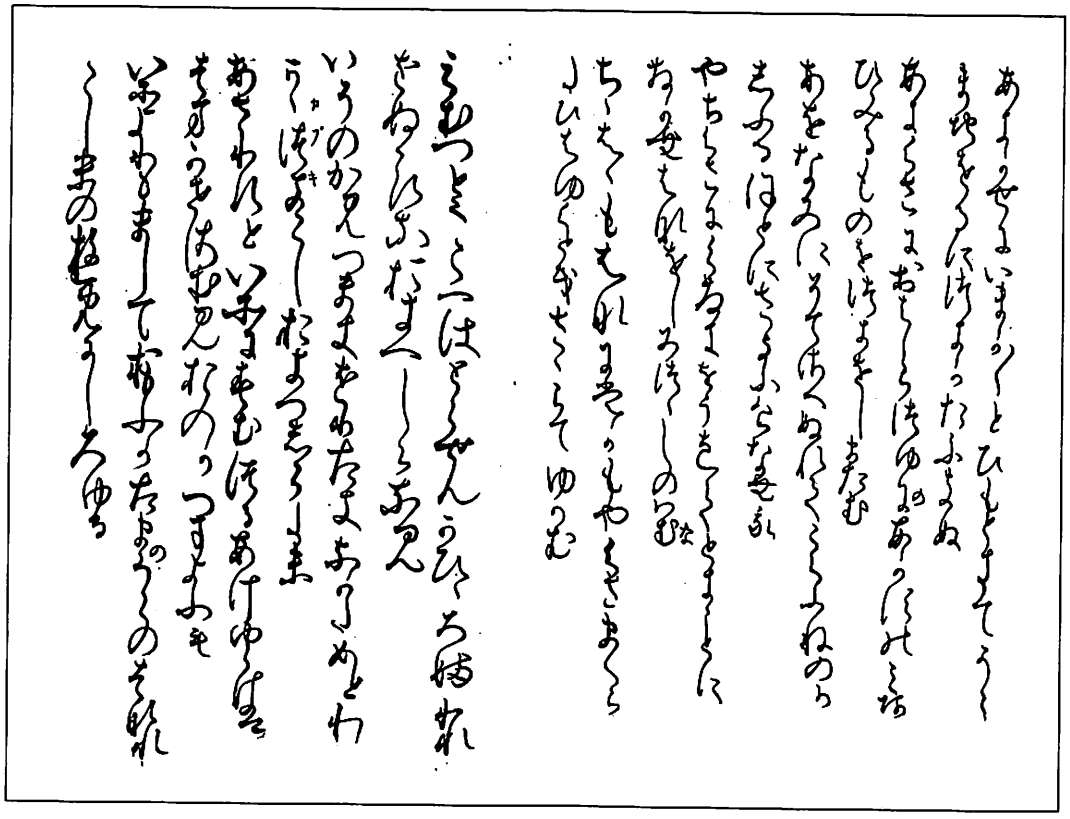
こひすゝなりましつしも
阿加等伎乃加波多例等枳尓之麻加枳
乎己枳尓之布称乃他都枳之良須毛
あかときのかはたれときにしまかき
をこきにしふねのたつきしらすも
あさなゝゝゝあかるひはりになりてしか
みやこにゆきてはやかへりこむ
いはのいもろわをしのふらしまゆす
ひにゆすひしひものとくらくもへは

15オ

15ウ

いろふかくせなかころもはそめましを
みさかたはらはまさやかに見ん
さきもりにゆくはたかせとゝふひとをみる
かともしさものおもひもせす
しものうへにあられたはしりいやましに
あれはましらんとしのをなかく
としつきはあらたまに〳〵あひみれと
あかおもふきみはあきたらぬかも
かすみたつはるのはしめをけふのことみ
つとおもへはたのしとそおもふ

わかせこかやとのやまふきさきてあらはやます
かよはむいやとしのはに
やまふきのはなのさかりにかくのこときみ
をみまくはちとせにもかも
このくれのしけきをのへにほとゝきすなき
てゆくなりいましくらしも
はつあきかせすゝしきゆふへとかむとそひ
もはむすひしいもにあはむため
あきといへはこゝろそいたきうたてけにはなに
なそへてみまくほりかも

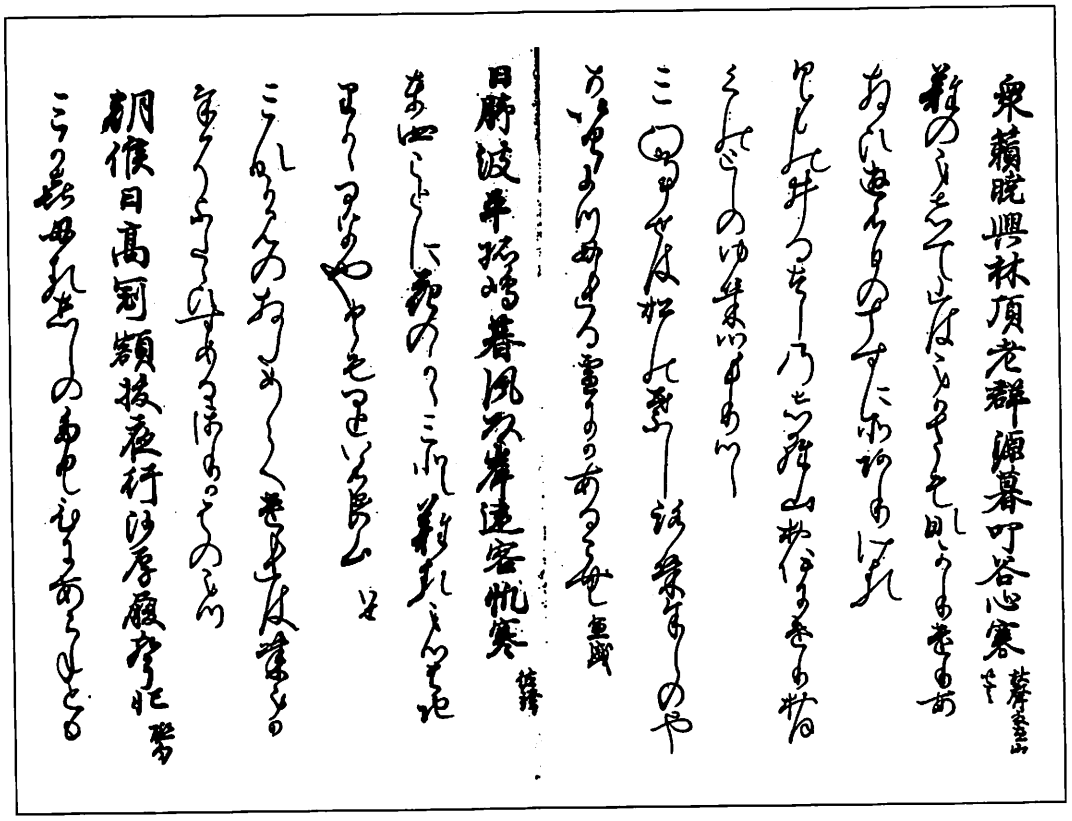


16オ

16ウ

あきかせにいまか〳〵とひもときてうら
まちをるにつきかたふきぬ
あきくさにおはしらつゆにあかすのみあ
ひみるものをつきをしまたむ
あをなみにそてさへぬれてこくふねのか
しふるほとにさよふけなむか
やちくさにくさきをうゑてときことに
さかむはなをしみつゝしのはむ
ちゝはゝもはなにもかもやくさまくら
たひはゆくともさゝらてゆかむ

えむつとにこへはとらせんかひゝろふわれ
をぬらすなおきつしらなみ
いそのかみつまきをりたきなかためとわ
かゝつきこしおきつしらたま
あさりすといそにすむつるあけゆけは
しまかせさむみおのかつまよふも
いそよりもましておもふかたまうらのはなれ
こしまのゆめにしみゆる



17オ

17ウ

(34)衆籟暁興林頂老　群源暮叩谷心寒　秋声多在山以冒

なのみして山はみかさもなかりけりあ

さひゆふひのさすにそありける

くものゐるこしのしら山おいにけりおほ

くのとしのゆきつもりつゝ

みわたせは松の葉しろきよしのや

まいくよつもれる雪にかあるらむ　兼盛

日脚波平孤島暮　風頭岸遠客帆寒　（ママ）佐幹

としことに花のかゝみとなるみつはち

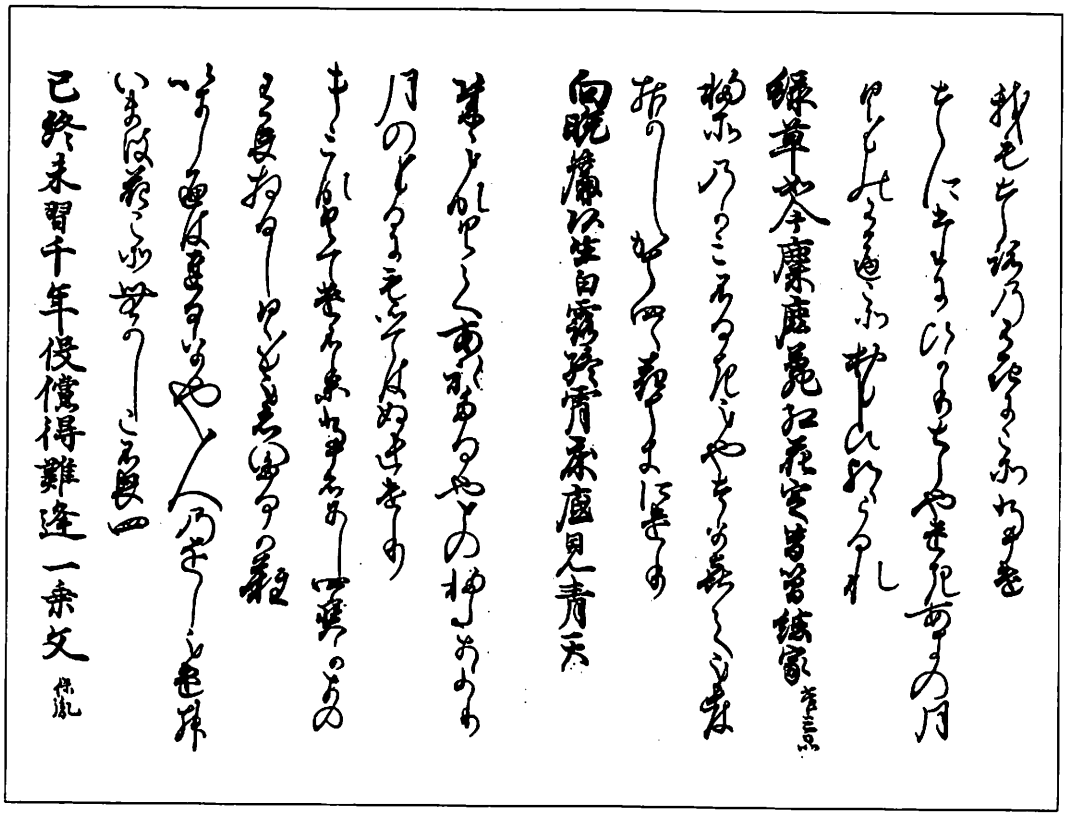
りかゝるをやくもるといふらむ　いせ

みなかみのさためてけれはきみか

よにふたゝひすめるほりかはのみつ

朝候日高冠額抜　夜行沙厚履声忙　聯句

みかきもるゐしのたくひにあらねとも



18ウ　　18オ

我もこゝろのうちにこそたけ
こゝにたにひかりさやけきあきの月
くものうへこそおもひやらるれ
緑草如今麋鹿苑　紅花定昔管絃家 菅三品
いそのかみふるきみやこをきてみれは
むかしかさしゝ花さきにけり
向暁簾頭生白露　終宵床底見青天

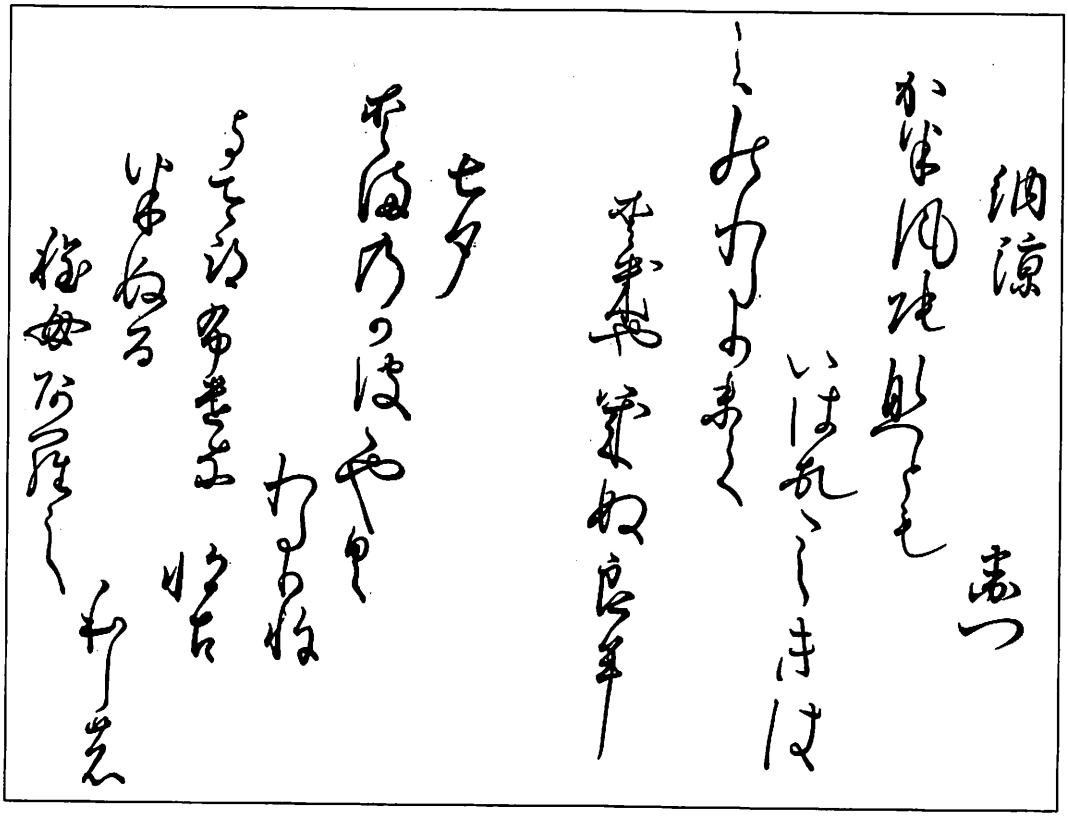
きみなくてあれたるやとのいたまより
月のもるにもそてはぬれけり
きみなくてけふりたえにししほかまの
うらさひしくもみえわたるかな
いにしへはちるをや人のをしみけむ
いまは花こそむかしこふらし
已終未習千年役　儻得難逢一乗文 保胤

19オ

19ウ

いつしかときみにとおもひしわかなを
はのりのためにそけふはつみつる
こくらくははるけきほとゝきゝしか
とつとめていたるところなりけり
阿耨多羅三藐三菩提の仏達わかたつそ
まに名賀あらせたまへ 採仏材詠 伝教大師
このよにて菩提の種をうへつれはき

鶴閑翅刷千年雪　僧老眉垂八字霜 為惣
たらちめはかゝれとてしもむはたま
の我くろかみをなてすやありけむ 良僧正
よの中にうしのくるまのなかりせは
おもひのいへをいかていてまし
みわかはのきよきなかれにすゝき
てし我なをさらにまたやけかさむ



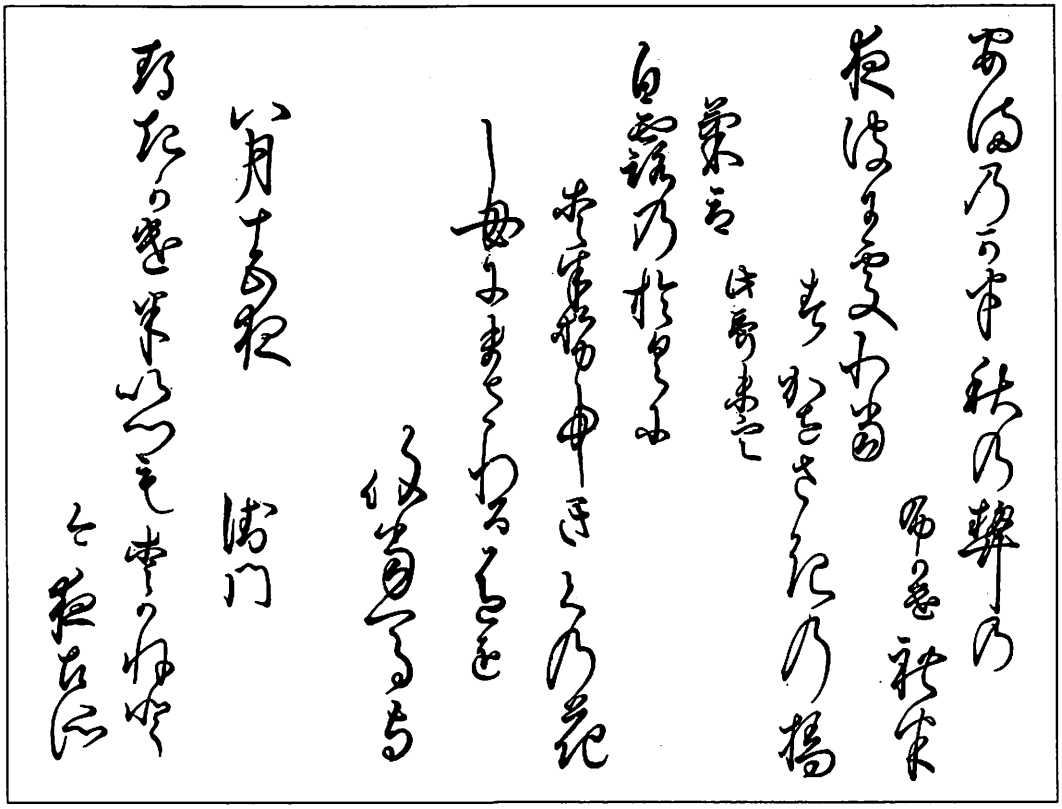
20ウ　　20オ

(35) 納涼　　衛門

かは風のなつとも
　いはすゝしきは（ママ）
このわたりまて
　あきやきぬらむ

七夕

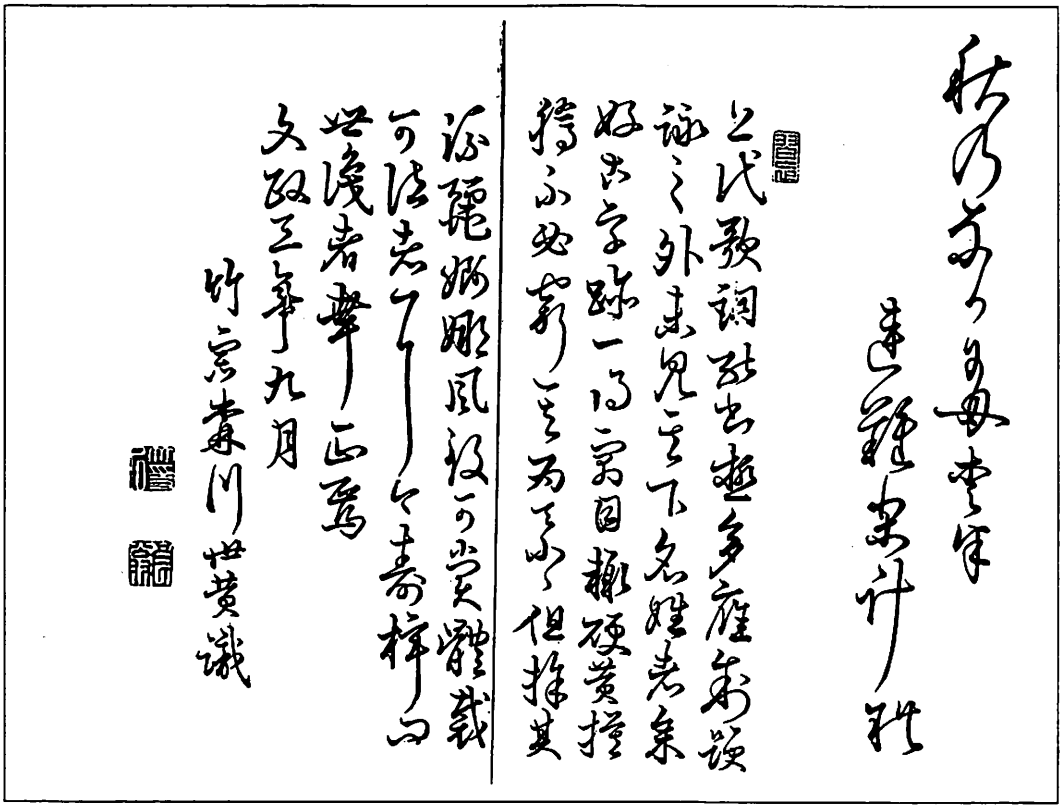
あまのかはゝやく
　わたりね
よさへふけな　ひこ
はぬる　　ほしの
程もあらし



21オ　21ウ

あまのかは秋の契の
　ふかけれは
夜はにそわた
　すかささきの橋
菊合 此歌未定
白露のおくに
　あはせてきくの花
しもにまされる色を
　さためよ

八月十五夜　衛門
つきかけはいつもあかねと
　今夜こそ



22オ

22ウ

秋のなかにもあは
れなりけれ

〔習忘〕
上代歌詞能書極多応制題
詠之外未見其下名姓者余
好古字跡一得寓目輙硬黄摸
謄不必窮其為某々但採其
流麗婀娜風致可賞体裁
可法者耳今寿梓而
世識者幸正焉
文政三年九月
竹窓森川世黄識
〔竹隠居〕〔良翁〕

解説

(1) 36（延長八年以前）近江御息所周子歌合

二十巻本該歌合全文に相当。原本は中山定二郎蔵、萩谷説（『平安朝歌合大成』。以下氏の説はこの書による）の第七種の書風であり、群書類従・歌合部類・書陵部本等は伝称筆者を藤原公任とする。浪華帖仮名巻は直接原本によったものではなく、模写本からの模刻とされる。

(2) 古今集巻四秋上二二九〜二三二

関戸本古今集切と推される。元来前田家に伝来した四八丁二〇八首の残欠本であり、昭和二七年ころ分割、現在二七丁がまとまって関戸家に残るほかはすべて断簡となった。原拠資料そのものは確認しえてないが、寛政六年の『世尊寺法書』にもこれと同じ一七行分の模刻が存するらしく、かなり古い時期に切られていたことになる。（付記参照）

(3) 逸名家集

近年報告された公実集（久保木哲夫「予楽院模写手鑑と家集切」リポート笠間一〇）のツレかと推される。なおこれについては別稿を予定。

(4) 古今集巻一春上　三二、三三

亀山切か。亀山切は丹波国亀山藩主松平家に伝来したもの。明治一五年の井口直樹模本によれば、巻一、二、四が残っていた。院政期の書写にかかり、時に紀貫之筆とも伝称される。

(5) 後撰集　巻二　春中　六七、六八

伝藤原定頼筆烏丸切と思われる。小松茂美『後撰和歌集校本と研究』には六七番詞書部分までの切（里見忠三郎氏蔵。切番号一二）が報告されており、該模刻が直接それに続く。小松前掲書には言及なし。

烏丸切は後撰集上巻のみで、下巻の伝存を聞かない。西本願寺本三十六人集と同時代の写、巻八冬の断簡は伝称筆者を藤原行成としている。

(6) 古今集　巻九　羈旅　四一一（詞書の一部）、四一七（歌のみ）

荒木切と思われる。荒木素白の旧蔵にその名を由来する切であり、巻一、二、六、八、九、十、十五、十七、十九の断簡が伝存している。やはり西本願寺三十六人集と同時代の写で、装飾料紙を用いている。

(7) 和泉式部集Ⅱ　八六、八九

和泉式部続集切である。正集切とは料紙を同じくするも別筆、西本願寺三十六人集と同時代の写で、もと二〇・六×一四・六糎程度の冊子本、空刷・下絵・色紙等の装飾料紙を用いている。

(8) 古今集　巻十一　恋一　五五〇

何切に相当するか未勘。

(9) 拾遺集　巻三　秋　一九九

何切に相当するか未勘。

(10) 和漢朗詠集　巻上　春　藤一三六

『夏蔭帖』三八の朗詠集切（関戸守彦氏蔵）に続くものであろう。『夏蔭帖』所載の切は打曇、金銀砂子散らしで、藤原行成よりもかなり下った時代の写とされる。

(11) 和漢朗詠集　巻下　雲四〇九、晴四一五、暁四二〇、松四二七～四二九、竹（不載）、草四四〇～四四二、猿四六一、管絃四六九、文詞四七八、鶴四五二・四五三、風四〇一・四〇二

伝称筆者をやはり藤原行経とする『月影帖』（中―二）所載の切もまた、和漢朗詠集から和歌のみを抄写している。あるいはそのツレか。『古筆大辞典』の堺切と同筆のようでもあるが、断定はむつかしい。

(12) 古今集　巻二　春下　九四、九五

この部分に葦手書きはないが、葦手様歌切と思われる。葦手様歌切は西本願寺三十六人集と同時代の写、冷泉為恭の模本が存在する。打曇、金銀砂子散らし、まま後書きの下絵あり。

(13) 治承二年右大臣百首

『書苑』五巻四号に、神祇の部三首が浪華帖に存すと指摘のあるもの。西行と同時代の写で、時に五首切、郭公切とも称される。小島孝之「治承二年右大臣家百首の新出資料とその考察」（国語と国文学五七―一〇）参照。

(14) 治承二年右大臣百首

隆信朝臣集Ⅱ四八七番歌でもある。この歌の詞書に「後法性寺殿百首にあふ恋」と見え、右大臣家百首のために詠んだものと知れる。雑賀美枝「兼実家十度百首について」（ノートルダム清心女子大学国文学科紀要二）は隆信朝臣集から推定して右大臣家百首たることを示したが、この模刻の存在でそれが確認される。

(15) 後撰集　巻九　恋一　五〇九～五一一

白河切である。五〇九・五一〇の二首については原拠資料が確かめられている（小松前掲書）。西行と同時代の冊子本、江戸で分割されたがゆえに「江戸西行」の異称あり。

(16) 後撰集　巻九　恋一　五三〇～五三八

やはり白河切である。小松前掲書所収。

(17) 89寛和二年七月七日皇太后宮詮子瞿麦合　序・一～一三

二十巻本、萩谷説の第一種甲類。模写本が京都大学附属図書館にあり（平松家旧蔵）、原本は静嘉堂文庫に現存す。同文庫刊『日本の書跡』に写真が掲げられている。

(18) 198承保二年八月四日摂津守有綱歌合　五・六
原拠資料は前田家旧蔵手鑑『浜千鳥』中の二十巻本断簡（萩谷説）。

(19) 千載集　巻十七　雑中　一〇八八、一〇五三、一〇八七
藤原俊成筆日野切である。歌順不整及び字高の不揃いは断簡三葉を模刻したものか、あるいは模写本によったか。
日野切は俊成七〇代の筆力充実した時期のもの、撰者自筆資料として伝本的にも貴重。田村悦子「藤原俊成自筆千載和歌集断簡日野切の考察とその集成」（美術研究二三三）に未収録。

(20) 300元永二年七月十三日内大臣忠通歌合　四五、四六
二十巻本、原拠資料は前田家旧蔵断簡（萩谷説）。

(21) 業平集　Ⅲ　一〇
伝藤原公任筆業平集切と思われる。未紹介断簡か。この業平集切は西本願寺とは別の三十六人集の分割されたものであり、料紙は打曇もしくは白紙に金銀砂子散らし。同筆の資料として西本願寺三十六人集中の斎宮女御集、友則集などがある。

(22) 後拾遺集　巻十　哀傷　六〇一（左註）、六〇二（詞書）
伝源実朝筆中院切と思われる。中院切はもと粘葉装冊子本、飛雲ある料紙に金銀砂子散らし。院政期の写で時に藤原定頼筆とも称される。

(23) 斎宮女御集　Ⅳ　七六、七七
伝小野道風筆小島切であり、栗山家旧蔵の断簡を原拠とし（尊経閣叢刊国宝斎宮女御集解説参照）、『手かゞみ』六二にその図版が収められる。
小島切の名は旧蔵者小島宗真に由来する。粘葉装冊子本の原態をとどめる零本が尊経閣文庫に伝存している。飛雲ある料紙に雲母を散らし、書風は香紙切や小堀切に似る。西本願寺本三十六人集と同時代の写で、『大手鑑』は藤原行成筆と極めている。

(24) 古今集　巻十八　雑下　九三五～九三九
伝小野道風筆本阿弥切である。原拠となったものの写真が『古筆大手鑑』二九に収められていて、両者比較するに、この模刻は虫損跡までかなり忠実に再現していることがわかる。
本阿弥光悦の旧蔵ゆえに本阿弥切の名をもち、巻十二の大部分と巻十六・十七の合装とが巻子本として残っており、巻十・十一は戦後に分割された。布目打ち唐紙に具引きし、文様を雲母で刷る。院政期の写。

(25) 古今集　巻十一　恋一　五二六～五二九
伝源俊頼筆巻子本古今集切と思われる。
この切は元永本古今集と同筆、筋切ともごく近い書風であって、藤原定実の手になるとの推測説あり。仮名序は巻子本のままで大倉集古館に

伝存し、巻十三は角倉家を出て現平瀬家蔵（冷泉為恭の模本あり）。『大手鑑』は藤原行成筆と極めているが、ずっと下って元永三年頃の写。唐紙・蠟箋を用いた華麗な典籍である。

(26) 三宝絵詞　中巻第二話

東大寺切。小泉・高橋『諸本対照三宝絵集成』に紹介された山田孝雄校本に「前田家蔵二行」とあるものが、原拠である。

東大寺切は源俊頼筆と伝称され、粘葉装のまま八六丁分が関戸家に伝わっている。唐紙に数種の型文様を雲母刷りし、墨界を引く。保安元年六月七日の書写奥書あり。

(27) 古今集　巻四　秋上　二一二

伝紀貫之寸松庵色紙である。原拠となったものの写真は日本名蹟叢刊『寸松庵色紙』に収められる。継色紙、升色紙と共に三色紙と称され、佐久間将監真勝の営んだ大徳寺寸松庵にその名の由来がある。布目唐紙に型文様ある料紙に散らし書き、一一世紀後半の写か。

(28) 新古今集　巻十二　恋二　一一二三

伝後京極良経筆小色紙か。もし然らば鎌倉中期の写となる。

(29) 古今集　巻十七　雑上　八九五

伝寂蓮筆右衛門切であろう。木下右衛門康勝の旧蔵たるにより右衛門切の名がある。粘葉装冊子本の原態をとどめる巻十九の一帖が徳川美術館に蔵される（他に巻二、三が冊子のまま残っている）。墨枠を引き肉太の書風で重厚に写し、類筆に詞花集・千載集の右衛類切がある。従来素紙のもののみが知られていたが、藍色内曇料紙を用いた一葉が「日本の書4　古筆Ⅰ」に収められる。

(30) 新古今集　巻七　七二三・七二四（詞書）

原拠資料未勘。

(31) 古今集　巻三　夏　一三八・一三九

原拠資料未勘。あるいは筋切か。

(32) 和漢朗詠集　巻下　帝王六六四、将軍六八九、王昭君七〇五、妓女七一八、遊女七二二、老人七三三、懐旧七四八・七四九、慶賀七七七、恋七八八、無常七九六、白八〇四

(34) と共に伝藤原公任筆太田切である。巻下を二軸に仕立てたものが掛川藩主太田家に伝来、その名がある。現在静嘉堂文庫蔵。ここに模刻されたものは、諸家に分蔵の将軍六八九～遊女の部分と、静嘉堂蔵の二軸とにほぼ含まれるが、帝王六六四、老人七三三は原拠部分不明。唐紙、蠟箋に下絵のある豪華な料紙を用い、巧妙かつ奔放に写している。近衛家旧蔵断簡は藤原行成筆と極められるが、公任・行成の時代よりかなり下った頃の書写である。

(33) 万葉集　巻三　一〇二～一〇四・一一二～一一六・一二一・一四三、巻一　四・一二・一四・一五、巻七　一〇九〇・一一八一・一一八二・一一八八・一一八六・一二七一（訓）、巻十二　三一六九、巻十九　四一五一・四一五三・四一五五・四一五七・四一五八・四一六三・四一四五・四二二一・四一四九・四一四六・四一四七、巻七　一二七一（本文）・一一八一（重出）・一〇八八・一〇八九、巻十二　三一九五～三一九七、巻十　二三一五・二三四九・一八四五・一八四六・一八五二・一八五三・一八五五・一八五七・二二四九・二〇九四・二〇九五・二〇九九・二一三一・二一四四・二一六八、巻十二三一九八、巻十五　三五四〇・三五四二～三五四五、巻十四　三四九六・三四八五・三四九二・三五七六・三三七三・三三七四・三四三〇・三五一三・三五一四・三五〇三・三四〇一・三三七九・三三八一・三五一七・三四三八・三三六五～三三六七・三四九〇・三四九二～三四九四（三四九二は重出）・三五二六・三三九八、巻二十　四三六二・四三六三・四三六一・四三七四・四三八〇・四三八一・四三八三・四三八六・四三八四・四四三三・四四二七・四四二四・四四二五・四二九八～四三〇〇・四三〇三～四三〇七・四三一一・四三一四・四三二五、巻七　一一九六・一二〇三・一一九八・一二〇二

元暦校本万葉集が原拠である。元暦校本は江戸初期に一五冊存したが、一冊佚して一四冊となり、さらに補修に際して一一一葉六冊分を割き有栖川王府（高松宮）本とし、のこりは伊勢射和の富山家に伝わった。のち摂津俵屋、桑名松平家、酒井家、水野家、古河家等を経て現在東京国立博物館保管。模本としては浪華帖仮名巻の他、尚古法帖、和学講談所の精密な模刻（巻一、二、七のみ）がある。伝来史その他については、佐佐木信綱『万葉集の研究第二』『万葉清話』参照のこと。

飛雲紙に墨枠ある粘葉装、「元暦元年六月九日以或人校合了」の奥書により元暦校本の名を有す。平安時代書写の万葉集諸伝本中最大最貴のもの。

(34) 和漢朗詠集　巻下　山四九五～四九八、水五一八～五二〇、禁中五二五～古京五二九、政宮五三六～五三九、仏事五九九～六〇三、僧六〇九～六一二

(32)でふれたように伝公任筆太田切である。禁中五二五～古京五二九は畠山記念館に、僧六〇九～六一二は五島美術館に蔵され、仏事六〇一・六〇二は各々小松茂美『古筆』、飯島春敬『古筆大手鑑』に写真がある。あとは未紹介。

(35) 長元六年十一月鷹司殿倫子七十賀屏風歌稿か。別に稿を改めて論じたい。

（付記）(2)の関戸本古今集切の前半部分の写真が尾上八郎『歌と草仮名』に収められていることを校正中気付いたので、ここに記しておく。